

特定非営利活動法人
日本リザルツ

平成29年度 事業報告書

日本リザルツ
平成30年3月5日作成



09

SEPTEMBER

2017年09月01日

18年度税制改正要望 外務省、9年連続「国際連帯税」を新設要望

2018年度（平成30年度）税制改正要望が8月31日締め切られたが、外務省は9年連続して「国際連帯税（国際貢献税）」を新設要望してきた（下記、外務省要望事項参照）。今回の特徴としては、持続可能な開発目標（SDGs）の推進という文脈の中から革新的資金メカニズムの必要が語られ、国際連帯税（国際貢献税）を要望するというもので、これまでの要望内容に太い線が入ったということで評価することができる。しかし、問題は国際連帯税の中のどの税制を要求するか。外務省は事例として航空券連帯税と金融取引税を挙げているだけで、この税を新設したいという具体性に欠けており、その分迫力不足であることは否めない。

ともあれ、私たちは具体的に航空券連帯税の実現を第一義に（次のステップは金融取引税）、次の舞台は与党税制調査会での議論の場となるので、ここをターゲットにロビーイングを強化していく。同時に、国際連帯税創設を求める議員連盟とともに、官邸に向けての申し入れ等を行っていきたいと考えている。どうぞご支援、ご協力をお願いしたい。

◆外務省 平成30年度税制改正 要望事項

[制度名]：国際協力を使途とする資金を調達するための税制度の新設

[税 目]：国際連帯税（国際貢献税）

[要望内容]：…前・中略… 以上を踏まえて、以下のとおり要望する。①と②は省略。

③ 課税方法として、我が国としてどのような方式を導入することが適当かについては、【持続可能な開発目標（SDGs）の推進等に係る我が国の取組や開発アジェンダを巡る国際潮流及び国際連帯税（国際貢献税に係る）国際的な取組の進展状況を踏まえつつ検討する。

ケニアのお土産を届けてきました

8月31日、日本リザルツのケニア担当トミーとインターンの春日、そして、長坂の3人で、ケニアの美味しいコーヒーと紅茶を国会議員の先生方にお届けに伺った。

逢沢一郎先生、秋野公造先生、秋元司先生、あべ俊子先生、岡本三成先生、小倉將信先生、小此木八郎先生、金子めぐみ先生、上川陽子先生、木原誠二先生、小林鷹之先生、佐々木さやか先生、高瀬弘美先生、真山祐一先生、三原朝彦先生、村井英樹先生、山際大志郎先生（50音順）の総勢17名の先生の事務所を訪問した。佐々木さやか先生と三原朝彦先生には、直接、お会いすることもできた。美味しいケニアアンティーとコーヒーで、先生方がますますご活躍されることを、リザルツ職員一同心から楽しみにしている。

ケニア出発のご挨拶

ケニア第2期結核予防・啓発活動プロジェクトの円滑な引継ぎのために本日、ケニアに出発することになった。東京事務所在籍中は、ご指導、ご鞭撻頂き、本当にありがとうございました。国際保健について勉強しながらケニアで精一杯取り組んでいきたいと思っている。今後ご相談させて頂くこともあるかと思うが、どうぞよろしくお願い申し上げます。また同時に、ケニアでは生活習慣病も問題になっているとのことで、栄養改善による結核予防、健康増進に向けたプロジェクトも行う予定。

雑居ビルに萌芽するビジネス

今週初め事業の対象となっているカンゲミヘルスセンターに向かい、同センター長らと協議し、運営する側が建物内部の状況を確認し、どのような家具備品が必要かも話し合った。これを基に図面を作成するべく事務所のあるナイロビ市内中心部のダウントウンに向かった。デザイナーの事務所は商店、飲食店、間口の狭い雑貨店などが並ぶ古びた雑居ビルの中にその事務所はあった。間口は2mそこそこ、奥行きも5,6m位、机は2台、奥の両壁に大きな製図用印刷機が置かれ、座るスペースも限られていた。



ヘルスセンターでの打合せ



雑居ビルの中にあるデザイナー事務所入り口

会社と言うよりは各専門家、製図を描く、建設の見積が正しいか評価する、デザイナーなどがお互いの専門性を活かし、一つの事業をこなしていく集団組織、パートナーシップ形式の集まりとなっている。

20代、30代の集まりで、ケニアのインフラ整備による活況の波に、自分たちも恩恵を受けていると話していた。これからも発展していく国の経済に期待しているようだった。それでもなお取り残されている人たちが多くを忘れてはいけない。

2017年09月04日

スラムの地域特性

2日にケニア共和国のナイロビに到着し、前年度からの引継ぎ作業を行っている。本日は、ナイロビのスラム街（カンゲミ地区やカワンガレ地区など）で地域に根差した活動を行ってきた看護師の方にお話を伺った。ケニアのナイロビには、キベラ、カワンガレ、マザレ、カンゲミ、ダンドーラ等のスラムがある。スラムと聞くと、貧しい人々が住んでいる場所と一括りにしがちだが、各スラムが抱える課題は異なるようで、私たちが活動を行うカンゲミ地区では、住民の移動が頻繁なことが結核の治療を難しくしているようだ。と言うのも、定職がないため、一時的な仕事を得ると職場の近くに居を移すため、住居が定着せず、CHVが訪問するともぬけの殻という状態がしばしば生じるようだ。そのため、電話番号や友人の名前などを聞き出すための信頼関係の構築が大事になる。効果的なプロジェクトを行うためにも、カンゲミ地区の地域特性や課題を、自分の目で確認し、そして、地域の方々にお話を伺いながら、まずは理解を深めていきたい。

セミナー参加「共同養育と家族再統合のプログラムを学ぶ」

皆さまのご支援ご協力のおかげで、らぼーる事業のクラウドファンディングが、半分まで達成することができた。残り11日で、目標達成まであと46%まできた。さて、先日は、「共同養育と家族再統合のプログラムを学ぶ」と題した国際セミナーに参加した。内容は、大きく2つで、「オンラインによる親教育プログラム」と「引き離された家族の再統合プログラム」。アメリカでは、離婚がどの関係者にとっても苦痛な過程になることを認め、離婚当事者へのカウンセリングや仲裁サービスの重要性を強調している。そして、12を超える州で、離婚する親に対して離婚教育の受講を義務化しているようだ。離婚後の共同養育を成功させるためのオンラインでの親教育プログラムは、無料で提供されるとのことで、離婚後の子どもの心的ダメージを少しでも軽減できることが期待される。日本では、FAIT-Japan研究会で、親教育プログラムが実践されているが、少しずつでも広まってほしい。後半では、セラプレイという、愛着理論をベースとした親子間で行うセラピーが紹介された。連れ去られた子どもの事例で、子ども自身も自分は大丈夫だと言い、周りの大人たちも子どもは大丈夫だと言う中で、子どもの遊びの中に悲しみや孤独感などが表されていました。子どもは周りの大人の言葉を聞いて、自分は大丈夫だと信じるが、心の中ではトラウマを抱えていることがあるのだという。とても興味深い内容であると共に、そのトラウマが解消されずに、長期に渡り影響することを考えると、とても痛ましい。親御さんには、子どもを突然引き離すことで、どれだけ子どもの心に影響を残してしまうのかを知って欲しいと思う。そして、そのようなことがない世の中になって欲しい。

2017年09月05日

GGG+フォーラム 10月10日開催！

皆様、お待たせしました！

GGG+フォーラム 2017 が 10 月 10 日に開催される運びとなった。昨年の GGG+フォーラムが大盛況だったことから、多くの皆様のお問い合わせ、ご賛同を得ており、今年はより幅広い分野の関係者をお呼びして、フォーラムを開催する予定。式次第は以下の通り。

式次第：

11:00-12:50 第 1 部：GGG、ポリオ、CEPI、栄養

12:50-13:10 軽食タイム

13:10-14:10 第 2 部：2030 年マラリア制圧へ向けた日本の貢献

14:10-15:30 第 3 部：水と公衆衛生、トイレ、子ども・女性
(変更あり)

また、このフォーラムは 12 月 13 日～14 日に日本で開催される UHC フォーラムのキックオフミーティングの意味合いも果たしている。現在、日本リザルツは、インターンの春日、ボランティアの成田などの協力も得て、会議を成功すべく、粛々と準備を進めている。正式な式次第ができれば、皆様にもご周知する。1 人でも多くの方の参加をお待ちしている。

はじめてのおつかい

リザルツで 1 週間の短期インターンをしていただいている成田さんについてご紹介する。成田さんは私の大学の後輩で、現在一年生。本日は議員会館へも同行していただき、明るく積極的に挨拶をしている姿に、私も元気を分けていただいた。1 週間という短い期間だが、日本リザルツでたくさんのことを吸収して、未来に羽ばたいて行って欲しいと思う。

お仕事が一通り終わった休憩に、アイスクリームを美味しくいただいた。



2017年09月07日

GGG+フォーラム、受付が開始！

標記「GGG+フォーラム2017:UHCとSDGsの実現に向けて」を10月10日(火)11:00~15:30にルポール麹町にて開催する運びとなった。GGG+フォーラム2016は、グローバルファンド、Gavi ワクチンアライアンス、GHIT ファンド、WHOの幹部をお招きし、G7伊勢志摩サミットに向けて日本の「健康の外交」を推進するために実施された。



2016年から17年にかけては、TICAD VIで「食と栄養のアフリカイニシアチブ(IFNA)」が立ち上がるなど、栄養改善への注目が集まっている。また、ポリオやCEPIに対して予算が計上されるなど、国際保健分野における日本政府の取り組みはより多様化している。このため、GGG+フォーラム2017では、UHCとSDGsの実現に向けて、感染症対策、貧困問題、人間の安全保障、子どもの健康改善、女性のエンパワーメントなどより様々なアクターを巻き込んで包括的に議論を行うことで、オールジャパンでグローバルヘルスの改善に取り組むことを目的としている。政府、国会議員、国際機関、企業、NGO、学界など、多様なステークホルダーの皆様の情報共有、連携の場となることを期待している。

Global Fund, Gavi, GHITファンド (GGG+)フォーラム (英)

GGG+フォーラム2017「UHCとSDGsの実現に向けて」

日時：2017年10月10日(火) 11:00-15:30
13:00-13:30(休憩) 13:30-14:30(休憩) 14:30-15:30(休憩)
会場：ルポール麹町 2階 大ホール(〒100-0001 東京都千代田区麹町1-1-1)

主催：(英) グローバルファンド (日) Gavi ワクチンアライアンス、GHIT ファンド、WHO
協賛：(日) 厚生労働省、(日) 国際労働機関 (ILO)、(日) 国際保健機関 (WHO)、(日) 国際農業交渉 (IAIS)、(日) 国際食料政策研究所 (IFPRI)、(日) 国際食料政策研究所 (IFPRI)、(日) 国際食料政策研究所 (IFPRI)

協賛：(日) グローバルファンド、(日) Gavi ワクチンアライアンス、(日) GHIT ファンド、(日) WHO、(日) 厚生労働省、(日) 国際労働機関 (ILO)、(日) 国際保健機関 (WHO)、(日) 国際農業交渉 (IAIS)、(日) 国際食料政策研究所 (IFPRI)、(日) 国際食料政策研究所 (IFPRI)、(日) 国際食料政策研究所 (IFPRI)

協賛：(日) グローバルファンド、(日) Gavi ワクチンアライアンス、(日) GHIT ファンド、(日) WHO、(日) 厚生労働省、(日) 国際労働機関 (ILO)、(日) 国際保健機関 (WHO)、(日) 国際農業交渉 (IAIS)、(日) 国際食料政策研究所 (IFPRI)、(日) 国際食料政策研究所 (IFPRI)、(日) 国際食料政策研究所 (IFPRI)

UHC SDGs 達成のために日本の家(資金拠出)が必要です！

UHC SDGs 達成のために日本の家(資金拠出)が必要です！

UHC SDGs 達成のために日本の家(資金拠出)が必要です！

UHC SDGs 達成のために日本の家(資金拠出)が必要です！

クラウドファンディング進行中！

リザルトでは現在2つのクラウドファンディングが進行中。ケニア案件の担当者は現在ケニアにおり、らぼーる案件の担当者が不在の場合もありますので、オフィスへいらしたお客様には私が説明し、ご協力をお願いしている。本日はいつもお世話になっている印刷屋さんがいらしたので、早速ご案内したところ、快く応じてくださることになり、らぼーるの女性相談員が嬉しそうにお礼を言っていた。

離婚と親子の相談室

らぼーる

厚生労働省調査研究事業

「ひとママのことで心配しているお子どもも電話してね」

別居や離婚、お子さまとの面会交流でお悩みの方、まずはお気軽にお電話ください

電話相談 オヤコイソコゴ!

0120-085-125

受付時間 平日 10:00~18:00
土日・祝日、平日夜間は要相談(予約制)

次年度事業への準備

ケニアに再来航してから10日が過ぎ、当初の慌ただしい時期は一旦去ったような気がする。それでも次年度の事業が開始するまでの準備、更に開始されてからの運営とまだまだこれからもゆっくりする暇はなさそうだ。準備期間においては、これまでのやり方や考え方を見直し、有効性・効率性を求めるだけでなく、またCHV(地域の保健・医療の改善に携わるボランティア)の人たちが受け身だけで終わらないよう、目的は同じでもそこに至る経路を彼らに考えさせ、作らせることなどを考慮したい。またこれまでの各種アンケート調査も参考にしながら、次年度事業の計画を具体的な実施内容にして進めていくつもりだ。最終的にはCHVの自立を図り、更に行政・国が現状をしっかりと把握して直接関わり、解決していくことを期待している。それまでの間我々がCHVを育成し、行政の手が十分届かないところをカバーして行くことになる。

2017年09月08日

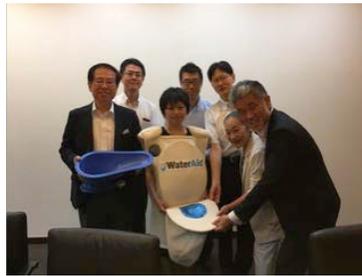
カンゲミヘルスセンターの訪問

本日、日本リザルツがプロジェクトを行うカンゲミヘルスセンターを訪問し、サブカウンティの担当者、CHVのユニットリーダーとの顔合わせ、次年度のプロジェクトの打合せを行った。カンゲミヘルスセンターは、いくつもの疾患別クリニックの集合体で、本日は、母親と子どものプログラムが開催されており、乳幼児や子ども連れの母親が集まっていた。もちろん、待合室にはぐったりとした赤ちゃんを連れた母親が数人待機しており、カンゲミ地区の医療の中心的な役割を担っていることがうかがい知れた。今後、プロジェクトが進むにつれて、ケニアの方々と考え方の違いで衝突することもあるかもしれない。しかし、病気で苦しんでいる方々の姿を目の当たりにすると、小さなことで衝突するのではなく、患者さんのために何ができるのか、より生産的な話し合いをしていきたいと思っている。

9月8日は…

本日、9月8日は、霞が関の魔法使いどーらの69回目のお誕生日。秘書としたことが、山積する業務に追われ、すっかり「おめでとう」を言うのを忘れていた…そんなどーらは、誰よりも気が利く。今日もインターン最終日の成田のために、美味しいドーナツの差し入れをしていた。なんで、リザルツそんなに忙しいの？というそのあなた！どーらを中心にただいま、10月10日開催のGGG+フォーラム2017の準備を進めている。12月に開催されるUHC会議のキックオフミーティングで、1人でも多くの方のご参加をお待ちしている。

GGG+フォーラムには、昨年同様、和泉洋人内閣総理大臣補佐官が来られる。



第三部では、トイレ大革命のお話もさせていただきます。



70を間近にして、身を粉にして働くどーらを、是非、祝福して下さい。

【奇跡のトチノキ物語】

2017年9月1日より『青葉通りこどもの相談室』相談員に入職いたしました和賀智之（精神保健福祉士）。この場をお借り致しまして、皆様にご挨拶させていただきます。今回がブログの初作成となり、『青葉通りこどもの相談室』の活動報告および頑張っている釜石市の実況を皆様にお伝えできればと思っている。

～奇跡のトチノキ物語～

本日は日頃からお協力いただいております国立大学法人 岩手大学 三陸復興・地域創生推進機構 釜石サテライトへ挨拶に伺った。



その折、敷地内に一本のトチノキが静かに佇んでおり、ふと立札に目をやると、あの日を耐えた木であることが書かれていた。

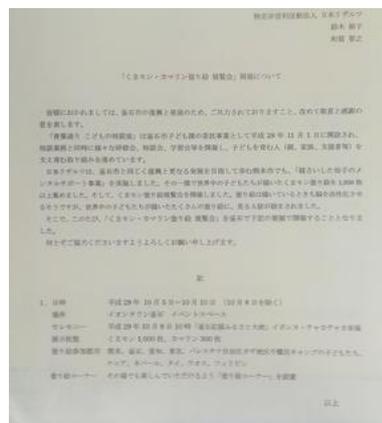
あの日から6年、生々しい爪痕を幹に残しながらもその土地に根を張る姿は、いま現在も頑張り続けている釜石の人々と重なるものがあった。依然、復興は続いており、我々の活動がトチノキのようにこの土地に根を張り、釜石の方々に寄り添いながら少しでもお力になればと思っています。

『青葉通りこどもの相談室』は新たな体制で頑張ります！！

【釜石市 青葉通りこどもの相談室 和賀】

釜石生活 93 ~カマリン塗り絵 絶賛配布中！~

今、釜石市内の保育所、保育園、こども園、幼稚園、それから、8地区の民生委員・児童委員の皆さま、生活応援センター、福祉施設、4箇所の子育て支援センターなどに、『くまモン・カマリン塗り絵 展覧会』開催について」と、カマリンの塗り絵原紙をお配りして歩いている。



かまリン むりえ
KAMARIN COLORING

先日、くまモン&カマリンのイベントが開催されたばかりなので、どちら様も快く受けてくださった。展覧会準備としては、来週は、パーティションをお借りする目途をつけ、搬入の段取りを組んで、それらを手伝ってくださるボランティアさんを募って、カマリンにも来ていただけるか交渉して…という具合に、今週同様忙しくなりそう。東京チームも「GGG+フォーラム 2017: UHC とSDGsの実現に向けて」の準備で大忙しだと思う。ケニアもまた同様に忙しいでしょう。ひた走ること大事ですが、時には立ち止まって冷静な目で周りを見ることも大切。自身も心がよ

人との出会い

2017年9月7日に、代表の白須さん・Save the Children Japan・World Vision Japanの方々と共に、栄養に関する会議のために、財務省・外務省へ行ってきた。

とても充実した内容の会議の中、議事録を取らせていただき、貴重な経験をした。素敵な時間を共に過ごさせてくださった、白須さんに感謝。また、省庁ではさまざまな方々にお会いすることができ、私にとっては、とても刺激的な出会いとなった。そして、外務省の地球規模課題審議官である鈴木秀生大使とお会いすることができ、とても温厚で度量が大きな方で、私にも気さくに話しかけてくださった。温かなまなざしで私のことを励ましてくださり、これからの活力となった。会議の終わりには、写真を一緒に撮っていただくことができ、価値のある人生の一ページを刻むことができた。また、私事になりますが、実は今回、初めて省庁の建物の中に入った。ドラマで見ていた建物。実際に目で見て、その場の空気を感じたときは、心が躍った。日本のすべての中心がある場所で、日本という自身の母国をより身近に感じる経験となった。日本リザルツでインターンを始めてから、今日で5日目。さまざまな方々との出会いや、多くの学びや経験をさせていただいている。また、今回の経験から、人との出会いのおかげで、人は成長することができるのだと実感した。これから、より自身の世界観を広げ、行動し続け、世界平和に貢献する存在になるために、日々、精進したい。



「別居・離婚家族と家族支援者のための共同養育と家族再統合のプログラムを学ぶ」

「らぽーる」の大川がすでにブログにあげているが、9月2日、3日の2日間、大正大学で開催された国際セミナーに、釜石から参加させていただいた。1泊3日の強行スケジュールではありましたが、参加しないと一生後悔すると思い、思い切って行って来た。行かなきゃ一生後悔すると思うくらい講師陣は豪華で、日本初導入のお話もあり、大変に貴重な国際セミナーであった。そして、東京国際大学の小田切紀子教授と大正大学の青木聡教授の数年来の悲願が、国際交流基

金日米センターの助成金を得て実現された今回のセミナーであった。会場で懐かしい方々にお会いできたり、新たな出会いもあったりして、行ってよかったと思う。



1日目は「離婚後の共同養育を成功させるオンライン親教育プログラム」についての話しが主体。オンラインで、いつでも誰でも、無料で親教育プログラムが受けられるシステムがあるなんて、画期的だ。

まだ英語だけなので受講していませんが、内容も素晴らしいらしく、離婚によってもたらされる影響について、最新の研究に基づき多面的に学ぶことができ、子どものための健全な共同養育関係を構築することや、それを支援することを教育する内容になっているようだ。参加者のアンケートからは「日本の制度化はいつのことやら…」とか、「共同養育そのものが、日本では受け入れられにくい」という意見もあったようだが、講師陣は「アメリカも baby steps で歩んできたし、日本でも変化の兆しはあるようだ。オープンマインドで、このプログラム中、何が日本に適應するか考えていきたい」とおっしゃった。

2日目は「離別後の家族再統合」（日本初導入）のお話しを、「全米行方不明・被搾取児童センター」の活動を紹介する形で伺った。アメリカでは、一方の親がもう一方の親の了解なく子どもを連れ去ることは誘拐と見なされる。日本では大前提が全く違うという社会環境の障壁はあるものの、一旦疎遠になってしまった親子の再会について、その劇的な瞬間を親も子も感動を持って迎え、その後も親子としての関係性を再構築していくにあたって、何をどう準備したらよいかということの重要なヒントをいただいた。続いて、「高葛藤の家族を癒す：セラピーの効果」についての話しがあった。親子関係遊戯療法のひとつである「セラプレイ」については、初めて触れたセラピーだが、健全な（親子関係の）回復の促進に役立つ援助方法として、アートセラピー、箱庭療法、プレイセラピー、愛着に基いた家族療法などとともに紹介された。もっともっと多くの支援者の方々に参加いただけるようになるといいなあ…としみじみ思いながら帰路にいた。

2017年09月09日

UNUBOREZU: It pays to be humble

In AIUEO, **U** stands for “Unuborezu” Do not be big headed.
Big headed people think they know everything. That is not right. In fact, they may not be knowing anything at all. It is not right to be a



fa28681238 freeart.com ©

big headed person. Being humble is a very good trait of successful people. they do what is right.

However, as is nature, sometimes things go wrong. You may fail to accomplish your tasks as required. In that light, therefore, it is very important to apologize. This is a good sign of someone who is ready to accept mistake, and promise not to do it again. While in all its worth, I recall that when I joined Results Japan, that was one of the most important lessons I was taught. With that hindsight, I encourage all my colleagues to always observe the principle of “UNUBOREZU”.

TENSION RISES BETWEEN PROGRESSIVES AND CONSERVATIVES IN KENYA'S PRESIDENTIAL REPEAT ELECTION

Kenya's 2017 polls will be remembered as the election of minor gains and confounding contradictions.

In the run up to polling, public discontent appeared to have been largely driven by the unprecedented sophistication in graft and tribalism in the President Uhuru Kenyatta's government.

But both Kenyatta and opposition candidate Raila Odinga demonstrated a weak commitment to tackling corruption. In fact, neither of them articulated a bold agenda to roll back graft.



As the grand finale of a dynastic struggle between the Odinga and Kenyatta families, both candidates boldly manipulated the ethnic formula while their supporters once again demonstrated a stubborn fixation with traditional voting patterns. This is reflected in the results from the presidential candidates' ethnic strongholds. Despite these failings, the Kenyan people handed Kenyatta a comfortable second term.

On top of this, some of the blunders and disturbing trends witnessed in previous elections were repeated. These included social media hate speech; a high-profile murder; poor communication from the electoral commission when it came to relaying results; inadequate voter education; and inflammatory statements by leading figures when provisional election results were released.

Mixed results

At the national level, Kenyans seem to have repeated a monotonous script that suggests a resistance to learning from past mistakes. Ultimately, there could only be one winner between the two presidential choices. President Kenyatta was poised to clinch a second term for obvious reasons. He is highly personable and seems to enjoy strong political chemistry with his supporters. He also boasts strong social media credentials - he skipped this year's presidential debate, opting instead to directly engage his supporters on Facebook. With the incumbency in his favour, he campaigned on the platform of his first term track record and projected the confidence to finish the job.

Opposition Leader

Raila Odinga, Kenya's veteran political stalwart, has a strong track record as a champion for political reforms, and is loved and disliked in equal measure. This is the fourth time he has vied for the presidency and lost even though questions persist over the disputed 2007 and 2013 election results.

Odinga lost the 2017 elections for two reasons. Some voters buckled under the weight of "Raila fatigue" and accompanying disillusionment. Both can be partly attributed to the fact that he has lost at every shot he's made at the presidency. Odinga missed the opportunity to exit the political stage at the apex of his political calling.

Granted, several other issues worked against him such as a weak internal party democracy, allegations of corruption and a disorganised campaign machine. That said, he should now consolidate his legacy by nurturing other leaders who are passionate about social reforms. For their part, the elections provide the Kenyan people with yet another opportunity to demand more accountability from the leaders they have voted into power.



カンゲミ会議とケニア保健省訪問

今日は次年度の事業が開始される前に、事業内容や日程について現地スタッフ及び各ユニットのCHVの代表と話し合った。スラムの入り口から会議場所のヘルセンターまでは、いつもと変わらない光景、騒音が伝わってきた。会議では次年度事業の概要を説明し、出席したCHVの代表にユニットに所属するCHVのとりまとめ、リーダーとして率先して仲間を引っ張って行ってほしい旨伝えた。彼女らに(4人の内3人が女性)自身の役割を良く理解してもらい、この1年間徐々に築き上げてきた連帯感を、更に堅固なものにしてもらえればと期待している。

午後からは先日お会いした Stop-TB の Evaline の紹介で、ケニア保健省の結核・ハンセン病・肺疾患対策部門の officer, Mr.Jeremiah Oldatir を訪問した。リザルツが次年度でカンゲミ・ヘルセンターの建替えや栄研化学さんの結核菌診断法(Lamp法)機器類の導入などについて説明した。Lamp法については今後他地域にも設置し、将来的にはケニア全体に普及されるよう希望していると伝えた。今後同機器類の導入手続きなどについて、助言や協力をしてくれるとの言葉に励まされた会談であったと思う。

訪問した保健省 officer の部屋の前で、Stop-TB の Evaline さんと



18 年度税制改正要望での「出国税」と「航空券連帯税」

（1）国交省の 18 年度税制改正（新設）にいわゆる「出国税」を要望

先に外務省が 18 年度税制改正（新設）で引き続き「国際連帯（貢献）税」を要望したことをお知らせしたが、国土交通省は『次世代の観光立国実現のための財源の検討』というきわめて漠然とした税制を要望している（下記参照）。この財源だが、マスコミでも報道されていますように、いわゆる「出国税」であることは間違いない。「出国税」とすれば、日本から飛行機や船舶で出国する人たちの運賃（航空券や船舶券）に税を課すことになる。飛行機ですと国際線を利用する人が税を払うことになるが、この仕組みは航空券連帯税と同じ。



（2）国交省は航空券連帯税に反対していながら、出国税を要望するのはおかしくないか？

国交省は航空業界とともに、この間ずっと航空券連帯税に反対してきた。その理由は、「観光立国として頑張ろうとしているのに、航空券に税がかかると観光客が減少してしまう」というもの。ところが、出国税もやはり航空券に税がかかることになるので、本来なら反対となるはず。航空券連帯税だと観光客は減るが、出国税だと観光客は減らないとでもいうのでしょうか。まったくのご都合主義といえる。

（3）出国税は誰に課税するのか？ 受益と負担の関係は？

この国交省の要望は、漠としていて具体的な税目も課税方法も税収もいっさい書かれていないが、メディア報道等によれば、航空機や船で出国する旅行者をターゲットにした出国税を想定している。

そこでまず課税対象の問題が起きるが、要望では「観光立国の受益者の負担による」と書かれている。しかし、「観光立国の受益者」とは誰なのか？ よく分からない定義だが、報道などを読むとどうやら訪日する外国人観光客のようだ。したがって、課税対象は外国人観光客となる。するといろいろな問題が起きる。ひとつは、出国日本人の扱い。受益者定義からすれば、出国日本人は課税対象にはならないはずだが、①徴税システムが煩雑になる、②WTO サービス貿易に違

反する、という問題が起きそうだ。①例えば同じ JAL の飛行機に乗っても、税を払う人（外国人）と払わない人（日本人）が出てくるので、JAL 側は分けて税務当局に報告・納入しなければならない。また、②は WTO 違反「運送サービスの越境取引での差別」の問題（注）につながってくると思う。したがって、外国（の政府や航空会社・旅行者）から相当反発されるのではないだろうか。

（注）「サービスの貿易」とは何か

実際、出国税のある香港やオーストラリアでは「課税対象：香港（オーストラリア）から出発する旅客」となっており、外国人と内国人を区別していない。さらに、要望内容では「受益と負担の適正なあり方…を勘案しつつ」と言っているが、次のようなフリーライダーが現われてくる。つまり、負担しないが受益する人たちだ。国内の日本人旅行者や日本人相手の国内旅行者、それと土産物屋やホテル業など観光地の地元、など。

（4）観光資源だけでなく、グローバルな課題を包含した「出国税」を

国交省が出国税を要望するということは、これまで「航空券税のような税制は観光立国を目指すという政策に逆行する、観光客が減少する」と言ってきたことを翻した、ということの意味する。しかし、観光資源の財政のための出国税というだけでは、上記のような受益と負担問題もあり、きわめて課税根拠が弱いと言える。本来、出国税であろうが航空券連帯税であろうが、日本政府の課税権が及ばない（したがって、一般消費税が課せられない）国際線航空へ課税することになり、その行為は日本政府が超国家の肩代わりとして行うことになるという性格を持つ。それ故に、税収も日本国内の政策の財源にするのではなく、超国家的（グローバルな）課題の財源にすべき、というのが「航空運賃への国際人道税」を提唱した金子宏・東京大学名誉教授だ。

実際、グローバルな課題は、貧困・飢餓、感染症、テロや難民、気候変動等枚挙にいとまがなく、したがってその財源もいくらあってもありすぎることはない（というか、圧倒的に不足している）。以上から、出国税もグローバルな課題の財源とすることも内包しつつ（とくに航空網など国際交通の発達感染症のパンデミック的拡大の危険性がありそれへの対処が求められている）、観光資源のための財源としても考慮する、ということも考えられるのではないだろうか。これを一言でいえば、「国際貢献と日本文化・観光に関する出国税」の創出となるだろうか。

【平成 30 年度税制改正要望（国土交通省）】

◎制度名：次世代の観光立国実現のための財源の検討（新設）

◎要望の内容：増加する観光需要に対して高次元で観光施策を実行するために必要となる国の財源の確保策について、受益と負担の適正なあり方や訪日旅行需要への影響を勘案しつつ、諸外国の取組も参考に検討を行う。

（報告：田中徹二・国際連帯税フォーラム／日本リザルツ理事）

2017 年 09 月 11 日

WHY TEAM WORK WITHIN AN ORGANIZATION IS VERY IMPORTANT

No matter how smart, talented, driven, or passionate you are, your success depends on your ability to build and inspire a team. A successful leader or staff is one who can spur his or her team members to work well together toward a common vision and goals.



To inspire your team members, you'll have to talk to them, of course. One of the best ways to do this is to share a quote that gives reason why you should work together. In that light, I compiled 15 quotes from well-known coaches, athletes, business leaders, and authors that will compel you and your team members to work well together:

"Individual commitment to a group effort—that is what makes a team work, a company work, a society work, a civilization work." --Vince Lombardi

"Talent wins games, but teamwork and intelligence win championships." --Michael Jordan

"Teamwork is the ability to work together toward a common vision. The ability to direct individual accomplishments toward organizational objectives. It is the fuel that allows common people to attain uncommon results." --Andrew Carnegie

"Alone we can do so little, together we can do so much." --Helen Keller

"Remember, teamwork begins by building trust. And the only way to do that is to overcome our need for invulnerability." --Patrick Lencioni

"I invite everyone to choose forgiveness rather than division, teamwork over personal ambition." --Jean-Francois Cope

"None of us is as smart as all of us." --Ken Blanchard

"Coming together is a beginning. Keeping together is progress. Working together is success." --Henry Ford

"If everyone is moving forward together, then success takes care of itself." --Henry Ford

"The strength of the team is each individual member. The strength of each member is the team." --Phil Jackson

"Collaboration allows teachers to capture each other's fund of collective intelligence." --Mike Schmoker

"It takes two flints to make a fire." --Louisa May Alcott

"Unity is strength. . . when there is teamwork and collaboration, wonderful things can be achieved." --Mattie Stepanek

"To me, teamwork is the beauty of our sport, where you have five acting as one. You become

selfless.” --Mike Krzyzewski

“The best teamwork comes from men who are working independently toward one goal in unison.” --James Cash Penney

ケニアの医療事情

ナイロビにきて1週間。さっそく目の結膜が何かしらに感染してしまった。日本の市販の目薬を頂いたが改善せず、週末には腫脹がひどくなるばかり。抗菌点眼剤を求めて薬局に行ってきた。カウンターの薬剤師に、症状を示し抗菌点眼薬がほしいことを伝えると、アレルギーなどの簡単な確認のみで250ケニアシリング（日本円で270円）で購入することができた。成分をみると、日本では医師の処方が必要な効き目の高い薬だ。聞くところによると、ケニアではその他の抗生物質なども医師の処方なしに薬局で購入できるそうで、これが多剤耐性菌の原因の1つになっているのかもしれないが……。そのためケニアの人々にとって、病院に行くのは最後の手段のようだ。実際に、ケニアの最貧困層の14%の人々は、病院に行くために私財を売り払う、または、親戚に借金をするとも報告されている。新規結核患者さんの多くも、まずは薬局で薬を購入し、改善しないと病院を受診するようだ。必要な時にすぐに受診できるよう、結核の早期発見のサインを一般の方々に広めていくことが大切だと思った。

秋野先生がオフィスに！

ワクチン予防議員連盟の事務局長である秋野公造参議院議員が、日本リザルツのオフィスに来られた。秋野先生のほか、長崎大学熱帯医学研究所ケニア拠点の一瀬休生教授、JICA



ケニア事務所の佐野景子所長もはるばるケニアからいらして下さった。スナノミ症の抑止に向けた取り組みや、日本リザルツの結核アドボカシープロジェクトについて意見交換を行なった。会議がきっかけで、ますます感染症抑止に向けた動きが進んでほしい。



2017 年 09 月 12 日

TB STILL A HEALTH THREAT, WHO WARNS

This article was first published by Daily Nation, in Kenya

Many countries think of TB as a disease of the past and this lack of awareness results in shortfalls in funding and a lack of political will to aggressively combat the disease.

But a new WHO report on tuberculosis published this week makes it very clear that TB is a disease of the present. An estimated 11.4 million people were infected in 2016, an increase over previous years. Some 2.9 million died from the disease, or more than 65,000 people a week on average; far more than Ebola ever claimed. And almost 600,000 people are estimated to have multi-drug resistant (MDR) TB. It's likely to be a disease of the future as well, especially in countries with the poorest populations. But it does have one significant point in common with Ebola — both diseases thrive where the medical infrastructure is weakest. "We face an uphill battle to reach the global targets for controlling tuberculosis," said Kenya National TB and Leprosy Programme officer, Dr. Jeremiah Oldatir.

It's difficult to accurately count TB cases. Some countries with a high incidence of TB have realized that their previous numbers woefully understated the true number of cases. In Kenya, for example, WHO estimates that almost half of the estimated 1 million cases are never reported to health authorities. A battery of different approaches taken in Kenya since 2000 have made clear how many cases were going unreported. Health authorities undertook several surveys — including one large-scale survey in April 2017. They also studied sales of TB treatment drugs and started enforcing rules for doctors to report TB cases to national health authorities. Many other countries, especially in Africa, have also had to revise estimates because of past undercounting.



There are countries where either the latest surveys are decades old or there's no data at all. In areas like Central Africa few countries have the resources to carry out exhaustive surveys. This could mean there are hidden pockets of undetected cases.

TB is inextricably linked to poverty.

According to an end line research conducted by RESULTS Japan in Kangemi, a slum at the outskirts of Nairobi, TB spreads more easily in crowded conditions, and malnutrition makes people more likely to activate, or switch from latent to active, contagious infections. The NGO's former director in Kenya, Riku Shiraishi, appealed severally to the Kenya government to act and make the situation better in the informal settlements. "If you do not act, the problem will spiral to a health crisis", Mr. Shiraishi warned. The disease also drags its victims down financially. "Their lives are absolutely devastated," says Jack Ndegwa, a policy advisor at KANCO. Over the long course of illness, families drain their savings trying

to obtain treatment for infected members. One of WHO's goals is to reduce the catastrophic cost of TB treatment. Several developing countries are assisting TB patients with food supplements and direct cash payments. WHO is working with various countries to assess how many TB cases suffer catastrophic health care costs. The disease also weakens its victims to the point that they can't work, so families lose needed income. TB, and especially drug-resistant TB, carry a stigma. The wider community or extended family often ostracizes TB patients, depriving them of what meager resources they might have otherwise. Finally, sick family members spread it to others in their households, perpetuating the cycle.



Newer treatments against TB aren't in wide use.

In 2012, the FDA approved Bedaquiline, the first new drug to treat TB in 40 years. Another drug, Delamanid, has been approved in the European Union. Both drugs were developed to treat multi-drug resistant TB. Clinical trials have shown that the drugs clear TB from sputum effectively. Although Bedaquiline has been used in 70 countries, only six — France, South Africa, Georgia, Armenia, Belarus, and Swaziland use it routinely. Health authorities also tend to take a cautious approach to new drug deployment because of fears of unexpected side effects. But Dr. Oldatir notes that patients with drug resistant TB have a 5-year survival rate of less than 20 percent. "Concerns about drug toxicity should be secondary to ensuring their survival" , he said.

TB control

Investing in TB control efforts up front can reduce ongoing costs to treat patients later on, argues Dr. Moses Kilonzo of the University of Nairobi Medical School. "We need to recalibrate," he says. "Right now, TB control is set up so that you only show up when you're dying." Most developing countries, including many countries with the highest TB burden, only treat symptomatic cases instead of treating people who've been in contact with active cases, says Dr. Kilonzo. Focusing on symptomatic cases makes it possible for people with TB to spread the disease to those closest to them.

Dr. Kilonzo acknowledges that it's expensive to hunt for active cases and to treat potential cases with preventive medications. But he points to efforts in countries like Russia, where initial large investments have paid off in lower TB case counts in subsequent years.

TB LAMP

It's critical, RESULTS Japan avers, to build a health system that offers care for multiple diseases instead of treating them individually, which is more wasteful. Infrastructure built up for TB control can become an asset to promote the overall health of a country's population. This informs the decision by the NGO to build a laboratory, and install a new TB LAMP machine to hasten diagnosis and

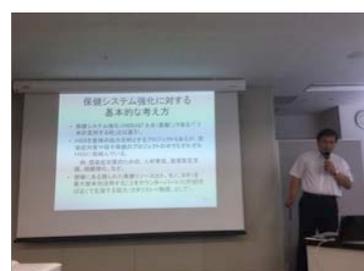
treatment. The project, which is in its initial stages is expected to increase the number of people detected at a time, and increase, generally, number of TB patients treated.

2017年09月13日

UHC ジョイントラーニングセミナー

9月13日、日本リザルツのインターン浅松は長坂とともに、UHC ラーニングセミナーに参加した。

講師はケニア保健省 UHC アドバイザーの渡辺学氏と JICA 人間開発部次長の渡部晃三氏のダブル「ワタナベ」先生。セミナーは UHC って何？という基本的な話から始まり、アジアやケニアなどの UHC に関する事例について紹介がされた。先生方が面白くフレンドリーで、セミナーは笑いもあり、大盛り上がりだった。インターンの浅松は、今日が We love T シャツのデビュー記念日で、セミナーでも一生懸命メモを取っていた。



クラウドファンディング達成！

本日、らぼーるのクラウドファンディングが達成された！

ご支援・ご協力してくださった皆様、そして陰ながら応援してくださっている皆さま、本当にありがとうございます。皆さまが応援してくださる気持ちをひしひしと感じながら、今後とも頑張っていく。まずは子どものグループの実施に向けて、動いていきたいと思う。立場や価値観は違えど、社会を良くするために一緒に活動していこう。

プラスチックバッグ使用禁止

ケニアでは今月9月1日から、スーパーなどで使われていたプラスチック製のバッグの使用が全面的に禁止されていた。確かにケニアの実情で好ましくないと感じていた主たる項目に、道端な

ど公共の場所でさまざまなゴミと一緒にプラスチック製のバッグが捨てられ、月日経ったものは徐々に地中に埋もれているなど、景観が損なわれるだけでなく、環境・衛生面でも大きな影響を与えている。使用禁止の動きは以前からあったようで、少なくとも 5,6 年前に、環境等に悪影響を与えるプラスチックバッグを使わないよう、スーパーの入り口で市民団体が呼びかけているとの話を聞いたことが有る。隣国では既にこの対策が進んでいることも、政府のみならず国民の意識を徐々に変えてきたのかも知れない。それでも当初今年 1 月に使用禁止の法律が施行される予定だったが、生産メーカーなどの反対を受け、高等裁判所の裁定により、9 月から実施されている。これにより、自分で再生可能な材質のバッグを持参するか、店で購入するかして買い物をすることになっている。中間所得層の人たちでも、バッグの為に 50, 60 シリングを支払うことを惜しんで、手で持ち帰る姿もみかける。一方で高級ショッピングモールにある、欧米人など所得の高い層が訪れるスーパーでは、プラスチックバッグと思われる袋に、購入した品物を入れているのを見て、一瞬何故許されるのかと思ったが、後で確認したところ素材が植物から作られているため、であることが分かった。ここにも貧富の格差が表れているようだ。私は今買い物をする際に、大変重宝させていただいているバッグが有る。電通さんにいただいた手提げバッグで、環境保護にも貢献している。

2017 年 09 月 14 日

ケニア食堂はじまる

私たち日本リザルツは、途上国の女の子に栄養教育をするため、ケニアで食堂をはじめる。そのため、クラウドファンディングサイト Readyfor にて、費用を集めるファンディングを実施している。次週の 19 日には、共に活動するケニアの CHV80 名とともにカレーパーティーを行う予定だ。日本リザルツスタッフお手製のカレーにケニアの代表的な野菜（キャベツ、カリフラワーなど）を入れて、いろいろな料理のアレンジがあることを伝えていく。ケニアでは、5 歳未満のこどもの 4 人に 1 人は、栄養不良により発育に問題を抱えてい

る。毎年 7000 人の乳幼児が結核に感染し、なかには命を失う子どもたちもいる。結核予防にはワクチンが有効だが、栄養バランスの良い食事が欠けるとワ



クチンの効果は十分に発揮されない。そこで日本リザルツは、貧困のため進学できず、栄養に関する知識のないスラム街に住む 10 代の女の子を対象にケニア食堂を開店する。家族の健康を守るために何を食べてらいいのか、一緒に調理をしながら実践的な知識を学習する。そして、出来上がった料理は、ケニアのスラム街に住む子どもたちと一緒に美味しく頂く。

釜石生活 95 ～「さとにきたらええやん」～

9月8日（金）、いつもお世話になっている方々が、自主上映映画「さとにきたらええやん」の上映会を開催され、お誘いを受けたので、見に行ってきた。舞台は大阪市西成区釜ヶ崎、別名「あいりん地区」…、日本リザルツの関係者の皆さまにとっては、結核罹患率の高い街として印象深い名前ではないでしょうか？「さとにきたらええやん」は釜ヶ崎で38年続く子どもたちの集い場「こどもの里」の里親やケアワーカーの方々と子どもたちが時にはぶつかり合いつつも、尊重し合って必死に生きる姿を描いたドキュメンタリー映画。「さとの子どもたち」は、それぞれに問題を抱えながらも、元気で前へ前へ進もうとしていて、そのひたむきさに心打たれる。路上生活を送る方々に「風邪ひかんとってください」などと言いながら、温かい食べ物を配ったりもする。下を向く人には「さとにきたらええやん」と笑顔で言う。そこには、支援する側、される側という境界はなく、濃くて温かい人と人のかかわりあいがある。この映画を「子どもの貧困」をテーマにした映画と表現する人も多いと思うが、声高に問題を叫ぶのではなく、ひたすら「さとの子どもたち」の日常を追い、何も隠さず映し出すことで、見る側が課題を引き受けることとなります。皆さん、それぞれに課題を受け取ったようだ。先日の「ゆるっと（釜っ子応援連絡会）」では時間がなかったが、メンバー間で帰り道、「私はこう思った、こういう見方をした、このセリフにグッときた、ここで泣いた」等を分かち合ったり、それを受けて「じゃあ、今、これから、何をすべき？どうすべき？」と、各々が受け取った課題について話し合いたいと思ったようだ。近いうちに機会を見つけて行うことになりそうだ。このような映画を自主上映するパッションを持った人が釜石にいて、それを見て語り合いたい仲間がいて、「釜石にきたらええやん」と言いたい気持ちになった。



KENYA GOVERNMENT TO PUNISH DRUG DEFAULTERS

From October 1, 2017, the government of Kenya will put to effect a law which will punish patients who fail to complete their medication. This follows a series of complaints from the NGOs and other health stakeholders about non-completion of doses prescribed to patients. "We spend billions to buy drugs and pay medical staff. When they fail, they are wasting our money", Dr. Cleophas Maillu, the Health Minister said. The law will be encapsulated in the Kenya Public Health Act, which has already been passed by the Kenyan Parliament.

This news comes at a time RJ is having a number of MDR TB patients, who might have defaulted in taking drugs before. It will now be a criminal offense to fail to take drugs. Efforts against chronic conditions and long term diseases like TB have been boosted by such a move in a great way.



釜石生活 94 ～秋の風物詩～

今日、「ゆるっと（釜っ子応援連絡会）」の会議に行くと、「ゆで栗」の差し入れがあった。

栗が大好きな私は早速いただきました。東北のゆで栗とは、そういうものなのかもしれませんが、塩ゆでの栗で、塩味の利いた珍しい栗だったが、秋を堪能することができた。「ゆるっと」のメンバーは、その名のとおり、ゆるっと集まって釜石の子どもの支援について情報交換しようというコンセプトで集まってくる面々だが、これがなかなか熱いメンバーで、参加するたびいろいろな刺激を受ける。今日も、会議が終了しても教室内のあちこちで、子どもの支援についての真剣な議論が繰り広げられ、なかなか会議室を去ろうとはしない。会議中、私たちの「くまモン・かまりん むりえ展覧会」へのボランティアを募りましたが、その申し出も徐々にいただき、充実した気持ちで相談室への帰路についた。



2017年09月15日

ケニア食堂はじまる

私たち日本リザルツは、途上国の女の子に栄養教育をするため、ケニアで食堂をはじめます。そのため、クラウドファンディングサイト Readyfor にて、費用を集めるファンディングを実施している。ケニアの現状を知っていただくため、本日は小学校のお昼の風景を紹介する。お弁当の中はお豆で、確かに植物性たんぱく質が豊富だが、成長期にはビタミン、ミネラルなどを含む食物もとりたいたいものだ。

ケニアでは、5歳未満のこどもの4人に1人は、栄養不良により発育に問題を抱えている。毎年7000人の乳幼児が結核に感染し、なかには命を失う子どもたちもいる。結核予防にはワクチンが有効だが、栄養バランスの良い食事が欠けるとワクチンの効果は十分に発揮されない。そこで日本リザルツは、貧困のため進学できず、栄養に関する知識のないスラム街に住む10代の女の子を対象にケニア食堂を開店する。家族の健康を守るために何を食べた方がいいのか、一緒に調理をしながら実践的な知識を学習する。そして、出来上がった料理は、ケニアのスラム街に住む子どもたちと一緒に美味しく頂く。もしよろしければ、私たちのプロジェクトに支援いただければと思う！また、応援の投稿やシェアいただくと非常に嬉しい。



【釜石の青空】

釜石の空は快晴ですっ！秋風も吹き始め、初秋の表情を見せている。釜石へ移住し2週間。少しずつではあるが、皆う様のお力を受けながら楽しく仕事している。



【さとにきたらええやん】

関係機関からのお誘いで、東北では初めてとなる自主上映会に参加させていただいた。大阪市西成区釜ヶ崎、この地で38年間も活動を継続している『こどもの里』を舞台にしたドキュメンタリー映画。その土地に住む様々な親子の問題を『子の視点』、『親の視点』、『支援者の視点』など複数の立ち位置から見つめている映画だ。ここで詳細を述べることは控えさせていただくが、『家庭』、『子育て』、『コミュニティー』、『貧困』など現代社会において潜在しつつも公開されにくい社会問題にフォーカスを当て、多くの問題提起を観客の心に点す映画の一つだと感じた。多地域で自主上映しているようですので、機会があれば是非ご観覧ください。映



画の中でもフォーカスされている『貧困』は我が国においても大きな課題であり、特に『子どもの貧困』は大きな問題となっている。平成25年国民生活基礎調査において、子どもの相対的貧困率は16.3%、ひとり親世帯の相対的貧困率は54.6%と極めて高い数値を示しており、海外と比較してもこの数値は高いものとなっている。岩手県盛岡市で実施された『盛岡市ひとり親世帯の子どもの生活実態調査(2016、母子家庭1173件を調査)』において母親の就労率が91.6%と高い数値を示した一方で【過去1年間に食料を買えなかったことがある】が47.4%と高い数値を示し、ここ岩手県においても『子どもの貧困』が現実であり【空腹を我慢している子ども】がいるという事実が浮き彫りとなった。この調査結果は色々な問題を露わにしている。銀幕の向こう側だけではない身近な子どもの問題を如何にキャッチできるか……。今後も地域の支援者と共に考え、行動・連携していきたいと決意を新たにした映画の話でした。

インターン浅松の初ブログ投稿 セーブザチルドレンの会合に参加

今日はセーブザチルドレンでWFPを招いた会合に参加した。一人で会合に参加するのは初めて...き、緊張する~!!! 今回の会合では、栄養に関してセーブザチルドレンさんのベトナムでの活動
今後、2020年までの栄養に関する国際イベントについての話をした。まだインターン始めて4日目ですが、日本リザルツにいと、どんどん新しい知識や出会いがあるので本当にいい経験になる。



2017年09月17日

観光資源のための出国税ではなく国際貢献と日本文化も加味する出国税を

観光庁（国土交通省）は15日、国内の地方の観光施設整備などに使う財源を確保するための有識者検討委員会を開催した。検討委員会には、次の3案が提示されたようだ。「▽出入国者（出国税など）▽航空機利用者（航空旅客税など）▽宿泊施設の利用者（宿泊税など）」（毎日新聞）。が、観光庁側の意向としては、この間の観光庁長官発言にもあるように出国税にしたいようだ。が、問題のひとつとして、出国税を日本人からも徴収するのがあるかにある。というのは、この税の受益者は訪日外国人観光客（以下、訪日客）であり、国際線利用の出国する日本人には恩恵が及ばないので、訪日客に対して課税するのが「受益と負担」の関係から言ってもっとも自然だ。ところが、WTO・サービス貿易などでの「内外無差別原則」があるため、そのことは違反になってしまう（つまり、出国日本人にも課税しなければならない）。すると出国日本人に同税を理解してもらうことはやや厳しいと言わなければならない。ついでに、「受益と負担」の関係でいえば、訪日客ではないビジネス客も受益しないまま負担だけになってしう（数は圧倒的に少ないとはいえ）。むしろ「宿泊税」や検討会では出ていないようですが「観光税」「駐車税」などの方がぴったり目的に適合すると思う。このように「受益と負担」という観点から言えば、観光資源の財源確保のための出国税では課税根拠がやや弱いと言える。従って、出国税の性格を、本来消費税が免税されているサービス（国際線利用）に税を課すということを勘案し、グローバルな課題に対処するための税として制度設計し直したらいかだろうか。つまり連帯税的要素を加えて、「国際貢献と日本文化・観光に関する出国税」（仮称）とすることだ。



「貧者の銀行」日本進出へ

【共同通信】「貧者の銀行」日本進出へ無担保融資で就労支援

「貧者の銀行」グラミン銀行といえば、ノーベル平和賞を受賞したムハマド・ユヌス氏が83年に創立した銀行で、マイクロクレジットと呼ばれる貧困層を対象に比較的低金利の無担保融資を主に農村部で行っていることで有名だ。日本リザルツでは、マイクロクレジット推進のためアドボカシーを行ってきた。

ムハマド・ユヌス氏は日本リザルツの名誉顧問です。ムハマド、ユヌス氏の言葉「リザルツの電話会議に初めて出席したのが1987年、以来リザルツは常にグラミン銀行の最高のパートナーだ」



2014年の10月16日付の朝日新聞「私の視点」ですが、弊団体の鰐部さんが書かれたもの。記事にも紹介されている菅先生はアフリカ開発銀行日本政府代表理事、世界銀行、日本政府代表理事を歴任され、よく日本リザルツオフィスを訪れている。

つい先日、オフィスにあった本を電車の中で読んだ。朝日新聞出版 「子どもと貧困」

朝日新聞出版 最新刊行物：書籍：子どもと貧困

これを読んだときに衝撃を受けた。日本の「もうひとつの現実」私の想像を超えた、孤独と無力感のなかで生きる子どもたち。その育ちゆえに閉ざされた道を拓くために、大人が、社会が、国ができることは何なのだろうか。背表紙に書かれた文章ですが、その通り。何ができるのか考えさせられた。そのひとつの答えが「マイクロファイナンス」であり「グラミン日本」だと信じている。

帰国報告① “ケニア生活 エスンバ編”

2016年8月末(8月24日だったと思う)に日本の成田空港を出発してから、先週の木曜日9月7日の早朝に成田空港に到着するまで、ケニアに滞在していた。まるまる1年間。このブログの読者は1年間どのようなことがあったのか、私は何をしていたのか、ご存知かと思う。私にとっては刺激的な1年間であったことはご理解頂けるかと思う。私にとってこの1年間は20年間生きてきて(振り返ればこれまでの人生の20分の1をケニアで過ごしたことになる)、もっとも人の繋がりが温かさを感じた時間を過ごした。「あつと言う間、でも長かった。」それが冒頭の問いに対する、私なりの答え。とさせて頂く。2017年4月から従事していたナイロビのスラム居住区における住民主導の結核啓蒙・予防活動の拡大支援事業では、現地で活動するボランティアに、会合の場で次のように伝えていた。「時間はお金以上に重要であり、価値がある。お金が不平等であることは事実、不思議ともっとも重要なものは、皆平等に持っている。それは時間。我々の時間の価値はお金では換算出来ない。1分は1000米ドル以上の価値だ(無限大と言う意味)。時間を大切にしよう。我々は幸いなことに『人を救う』ことができる機会を得ている。今こそ時間を有意義に使って、より多くの人を救おう。」この言葉が彼らの心に響いて(そう信じたい)、少しでもモチベーションが向上、「本当のボランティア精神」が育ってくれていることを願っている。このような感覚になったのは、私が資金が全くない田舎の村で活動していたことが由来すると思う。私はこの1年間で、自分の貯金を使って、またはクラウドファンディングを用いて皆様からご寄付いただいた貴重な資金を活用して、完全なプライベートのボランティア活動。そして、外務省からのN連資金を活用して、公的な国際協力。この2つを行いました。それらの共通項は「人を救いたい」「人を幸せにしたい」という信念だ。もちろん、違いはあるが、本ブログでは小難しいことは言いません。私がエスンバ村(ケニアの最貧困地域の村)で生活していた時は、みなさんが想像されている「貧困地域」そのものの生活をしていました。水がない、電波がない、食料がない。ある日のスケジュールを紹介しよう。朝5時過ぎ。ニワトリが騒ぎはじめるので、

目が覚める。外に出て家畜(牛、ヤギ、ニワトリ)に餌をやる。餌のストックがない場合は、近くの草を切って集めて与える。その後にヤギと牛の乳しぼり、ニワトリの卵の回収。これらが朝食になる。朝食のためマッチで火を起しミルクを温め、卵を茹でそれらを食べる。日中はその日によって大きく変わるが、滞在していた家には電波が全く届かないので、近くの町まで乗り合いバスで約20円を支払って向かう。その際に



は町にある知り合いの商店に行きスマホの充電をお願いする。野菜などを買い、家に帰り食事をとる。午後はエスンバ村を歩き回る。もちろん舗装はされておらず、歩くのは簡単ではない。岩がゴロゴロある畑を歩くことを想像してください。数件のお宅を訪問、その際に3キロほどのトウモロコシをお裾分けしたり、畑仕事のお手伝いをしたり、家畜の餌集めをしたり、詳しくお話を聞いたり、皆さんが困っていることを手伝う。夕方頃、ジャンクションと呼ばれる小さな商店街に向かい、パートタイムで仕事をする。それは8時頃に終わる。そこから家までは真っ暗のなかを歩いて帰る。約30分。真っ暗のなかスワヒリ語の会話を聞きながら歩く。帰宅してからは食事の準備。基本はウガリ。ロウソクの温かい光の中9時頃に食事を取り、水があるときはシャワーを浴びる。バケツいっぱい。水の量を見て「今日は髪は洗えないな」と。水の使い方は計画的だ。10時には就寝する。このような生活を7ヶ月続け、その中で私が問題だと感じたのが「スナノミ症」だった。ただ単に「問題だ」と感じたのではない。「これは国際社会が目を向けてくれる」と感じた。これまでにこのような状況を見たことはなく、写真、患者たちの言葉にはものすごいインパクトがあった。まずはじめに日本リザルツ代表の白須さんを招待した。「風揚げをするから」と。私は出発前に白須さんから「風揚げをすればいいんじゃない」と言われていた。お呼びすれば必ず来るとわかっていた。それほどパワフルな方だ。実際にお越しいただいたときには、今思えばかなり失礼ですが、乗り合いバスに乗せ、エスンバ村を歩かせた。もちろん風揚げも現地の小学校で校長先生から許可を取って、実施した。エスンバ村を紹介するときには、自然とさりげなく、スナノミ患者のお宅を訪問した。私は戦略的にそうさせ、白須さんが興味を持つだろうとわかっていた。今では、ご存知のように、スナノミ症といえば日本リザルツ。帰国してから東京事務所に数日行ったが、スナノミ症予防になる靴が次々と届いている。白須さんからのアドバイスを受け、スナノミ症対策の活動を始めた。医療機関へ治療法を聞いて回り、患者に声をかけ、薬局に足を運び薬の値引き交渉、クラウドファンディングの実施。その結果これまでに4回のスナノミキャンペーンを実施。600名以上の深刻なスナノミ症患者を治療。1200家屋以上をスプレーで洗浄した。これに加え、日本全国から寄せられた靴のプレゼントによって、エスンバ村の多くの方が救われた。さらにスナノミ症の知識を得て、住民ができる予防(身体・家中をきれいに保つなど)を始めていると聞いている。

その間にエスンバ村へ4名の国会議員の先生方、アフリカの歌姫、イボンヌチャカチャカさんが訪問、スナノミキャンペーンを視察している。その結果、もっと長期的に、もっと広範囲で、もっと大々的に、「スナノミキャンペーン」を進めるために、いろいろなセクターを巻き込みなが

ら、議論が進んでいる。

以上を田舎編とさせていただきます。長い文章は気まぐれな人間の心に残りません。心に残って欲しいと願っている。伝えなければならない。今日書いたことは、私がひとりで成し遂げたものではなく、多くの方々が協力してくださった。一人ひとりが世界を変えることができる。心強い仲間や応援団があってこそだ。心から感謝したい。特にエスンバ村では、家に泊めていただき(家族です)、食事を提供していただき、一緒に活動させていただいた、エドワードには言葉では表せないほど感謝している。彼ほど心から「人を救いたい」と考えている方はいない。彼以上に人間として尊敬できる方はいない。そんな彼が日本に来る。

案内メールを一人ひとりお送りしているが、「GGG+フォーラム 2017: UHC と SDGs の実現に向けて」が10月10日に東京で開催される。この会合に合わせ、エドワードが来日する。第3部の「水と公衆衛生、トイレ、子ども・女性」では彼のスピーチが予定されている。是非、ご参加ください。アドボカシーって、現地を実際に見て、声を聞かないと意味がない。彼のように現地生活して、活動する方の声を聞いて欲しい。切に思う。また後半を書いていく。

2017年09月18日

10月10日は…GGG+フォーラム！

「GGG+フォーラム 2017: UHC と SDGs の実現に向けて」を10月10日(火) 11:00~15:30 にルポール麹町にて開催する運びとなった。日本リザルツでは、集客戦隊リザルツレンジャー隊が結成。3連休外視で、広報活動に励んだ。レッド池田を筆頭に、白石ブルー、グリーン大川、イエローカラマツ、ピーチ姫、門井ブラック、そしてピンクことりだ。

計700人の方にメールを送らせていただいた。何度も届いていらっしゃる方がいたら、申し訳ない。

GGG+フォーラム 2017 では、UHC と SDGs の実現に向けて、感染症対策、貧困問題、人間の安全保障、子どもの健康改善、女性のエンパワーメントなどより様々なアクターを巻き込んで包括的に議論を行うことで、オールジャパンでグローバルヘルスの改善に取り組むことを目的としている。政府、国会議員、

国際機関、企業、NGO、学界など、多様なステークホルダーの皆様の情報共有、連携の場となることを期待している。皆様の積極的なご参加をお待ちしている。



ケニア食堂はじめます

私たち日本リザルツは、途上国の女の子に栄養教育をするため、ケニアで食堂をはじめます。そのため、クラウドファンディングサイト Readyfor にて、費用を集めるファンディングを実施している。まずはケニアの現状について知っていただくため、ケニアの食事や市場の風景をご紹介します。ケニアの代表的な主食(炭水化物)はトウモロコシの粉でできたウガリ。また、市場では取り扱う穀物の種類は多いようだ。地域によっては、緑黄色野菜の摂取は難しいとも聞いている。

ケニアでは、5歳未満のこどもの4人に1人は、栄養不良により発育に問題を抱えている。毎年7000人の乳幼児が結核に感染し、



なかには命を失う子どもたちもいる。結核予防にはワクチンが有効だが、栄養バランスの良い食事が欠けるとワクチンの効果は十分に発揮されない。そこで日本リザルツは、貧困のため進学できず、栄養に関する知識のないスラム街に住む10代の女の子を対象にケニア食堂を開店する。家族の健康を守るために何を食べたらいいのか、一緒に調理をしながら実践的な知識を学習し、そして出来上がった料理は、ケニアのスラム街に住む子どもたちと一緒に美味しく頂く。もしよろしければ、私たちのプロジェクトに支援いただければと思う！また、応援の投稿やシェアいただけると嬉しい。



2017年09月19日

インド結核アドボカシー活動

9月19日、20日、ジュネーブからストップ結核パートナーシップの副代表であるインド人医師のスバナンド・サフ先生が、急遽来日し、インドの結核抑止に向け、アドボカシー活動を行った。インドは世界一の結核高まん延国で、何と世界の結核患者のうち27%がインドだそう。今回の訪日では、ストップ結核パートナーシップ推進議員連盟の事務局長である浜田昌良参議院議員をはじめ、結核研究所所長である森亨先生、栄研化学株式会社、そして省庁などの関係各機関を訪問し、インドにおける結核抑止に向けた課題について議論を行った。サフ先生の訪日がきっかけで、インドの結核抑止に向けた取り組みが促進することを願う。



2017年09月20日

ストップ結核パートナーシップ サフ先生 来日2日目

ブログ投稿2回目のインターンの浅松からの報告。

ストップ結核パートナーシップの副代表であるインド人医師のスバナンド・サフ先生も昨日から引き続き、日本リザルツにいられている。午後からサフ先生、白須代表と一緒に、ストップ結核パートナーシップについてお話するため、アジア開発銀行、Lixil、AMEDにお伺いした。アジア開発銀行とLixilがある霞ヶ関ビルは日本リザルツのご近所さんと言っていいほど近くにあるので、歩いて霞ヶ関ビルに向かう。歩きながら、サフ先生に私が大学在学中にUNV エチオピアでインターンをしてきたことなど自己紹介。サフ先生もエチオピアに会議のため何度か行ったことがあるそうだ。



写真は36階のLixilのオフィスからの素晴らしい眺め。霞ヶ関周辺が見渡せる。あ、日本リザルツも発見!

そしてLixilのオフィスに飾ってあるトイレ! 写真に写っている子どもの満面の笑顔が本当に嬉しそう!

サフ先生と白須代表もトイレと並んで記念撮影。霞ヶ関ビルを後にして、引き続きサフ先生、白須代表、わたくし浅松でAMEDに向かった。AMEDの末松理事長はストップ結核について熱心に耳を傾けてくださり、サ



フ先生は非常に嬉しそうな様子。

二日間の短い来日だったが、サフ先生も今回の来日で非常に得たものが多かったようで、AMEDの末松理事長との会合の後、名残り惜しそうに白須代表と挨拶を交わし、日本を後にした。先週は初めて日本リザルツに入ってオロオロと戸惑うことが多かったが、白須代表とスタッフの皆さんのたくさんのサポート、(そして藤崎さんの美味しい差し入れがあり)、今日もインターン楽しかった~と思う毎日を過ごしている。今後も引き続きがんばろうと思う！

現地の方を知る機会

先日、次年度事業申請に必要な図面の作成を依頼していた建設業者の事務所を訪れ、設計士の作業を直接見ながら、協議・指示を出していくつかの図面が完成した。以前ブログで紹介した別のデザイン

会社は、ナイロビ市内でも中心に近いDowntownの雑居ビルに有り、間口の狭い小部屋が事務所兼作業場になっていた。まだ若いパートナー形式の会社で、安定はしていないかも知れなが、将来飛躍の可能性も有り得る場所だった。先日訪れたのは量(企業規模)より質(国の建設業者監督局から最優秀の評価を得ている)を実行している中規模以上の会社で、市内中心部ではないが自社ビルの中に、他のテナントと一緒に事務所を構えている場所であった。



量より質の建設会社事務所で、設計士と打合せ

担当してくれた設計士は、家族を地方に残し甥(ビジネスを学ぶ大学生)と一緒に、市内に住んでいるとのこと。この様に単身ナイロビ(都市)に出てきて、地方にいる家族を養っている社会形態は他国でも同じようだ。ただこの設計士は、この仕事に必要な知識・技術は学校で学んだものではなく、この会社に入ってから独学で習得したと語っていた。真偽や何か自分を売り込もうとしたのか定かではないが、作業中の説明や指示を受けての対応などから、以前のデザイン事務所の担当者と比較し素直に受け取っても良いように思えた。これまで我々が結核予防の支援事業を通して、CHV(地域保健ボランティア)の人たちと会ったり、話したりすることは有るが、他の現地人の方と仕事を通して彼らの考え方、国民性をもう少し分かっていければと思っている。因みに設計士との私的な会話は、通常勤務時間を過ぎて作成してくれた後、一緒に車の中で交わしたものだ。

ケニア食堂をはじまる

私たち日本リザルツは、途上国の女の子に栄養教育をするためケニアで食堂をはじめます。



そのため、クラウドファンディングサイト Readyfor にて、費用を集めるファンディングを実施している。昨日は、ともに栄養教室を行う現地のスタッフ約 40 名とともにキックオフイベントを行った。日本のカレーライスを持参すると、ヤーヤーダンスという不思議なダンスでお返ししてくれた。1 周年記念をケーキでお祝いし、今後もともに取り組んでいくことを確認しあう楽しいイベントになった。

クラウドファンディング達成！

去る 9 月 15 日、ついに、らぼーる事業のクラウドファンディングが目標を達成した！

これまで支援をして下さった皆様、情報の拡散や、その場を提供して下さいました皆様、陰ながら応援して下さいました皆様に感謝している。当初、こんなにもたくさんの方から支援が得られるとは思ってもおらず、途中でちょっとだけ諦めかけていた時もありますあったが、皆さまのご支援のおかげで、見事、目標を達成することができた。皆さんのお気持ちを胸に、離婚を経験した子どものグループの開催に向けて、既に動いている。また、活動内容は、随時、らぼーるの HP やフェイスブックにアップしていくので、ご覧頂ければと思う。これからも皆さんと協力して、子どもの支援が出来ればと思う。

2017 年 09 月 21 日

THE THINGS THAT MONEY CANNOT BUY

This Post Is A Must Read

We are obsessed with, fixated on and deranged by money in this world. From the top dogs to the little mutts - all seem to wake up with just one overwhelming thought in mind: **“how do I lay my hands on more money?”**

Money, we think, is the escape from poverty and misery and the path to happiness and peace of mind. Money is respect and status. People adore those with money. And because many people don't seem

to worry about how money is acquired, all means are acceptable. When I started working with **RESULTS Japan**, I was taught a few lessons about money by my former boss, **Riku Shiraishi**. On reflection, I hereby write.

But what exactly is it we think we get when we get money? No doubt about it: money matters. It does indeed release us from the many indignities of poverty. Being financially self-sufficient allows us to crawl out from under the thumbs of those who hold us down. There is great liberation in having your own money, to spend as you please. Money allows us to fulfill the obligations we all have to our families, particularly our children. And of course, money allows us to have many more material experiences that would otherwise be unavailable to us: fine meals, interesting holidays, nice attire.

Who wouldn't want all that? I do not deride your desire to have more money; it's a very powerful force in your life. **But, but, but...**

What we fail to do is keep money in its place. It matters, but it is not everything. It is not the magical key that unlocks a magical kingdom. It will open doors for you, no doubt - but what's waiting beyond those doors should also worry you. The best way to think about this is to understand the crucial things that money does NOT buy.



First, clichéd but true: **money does not buy friendship**. It buys attention and sycophancy for sure, but real friendship? Never.

Those who appear to be your friends because you have money have no attachment to you. None. They are attached to your money. If your money is not available to them, they go. Simple. You will never buy the unconditional bond of friendship with money, period. You will sink like a stone from people's thoughts if you were only there because of your money.

Money won't buy you peace of mind. It might buy a very comfortable bed and a nice house in a quiet neighborhood and a platoon of aides and guards, but that is not the same as peace of mind. That comes from within. It comes from acceptance and calmness. People scrabbling incessantly for the next dollar (or next million dollars) are in fact the least likely to find peace of mind. They may look calm and collected, but the inside is a furnace of stress.

Money won't buy taste. It can buy you interior designers and brand consultants and exclusive attire, but taste? That's a whole different thing. Taste comes from high personal standards and from a strong sense of balance and coherence. Very rich people are the least likely to have a taste. They don't develop it; they just buy the external manifestations of it. Inside, they're still the same tasteless bumpkins they started off being.

Money can't buy you discernment. The ability to tell great from merely good; honesty from trickery; true decency from PR; a character from the brand; these are all elements of discernment. It is a vital

ability of life to be able to separate the wheat from the chaff. Again, you can't buy it. You can buy advice, but you can't buy the x-ray vision you need. That comes from learning life's lessons constructively.

Lastly, money won't buy you wisdom. It is in fact very, very rare to find a wise rich person. Have you ever paid attention to the advice of the really rich? It's usually shallow and self-serving nonsense. They are usually feeding their own egos and own interests. Wisdom means working for the greater good for the longer term. Most of our rich do the exact opposite: they work for their own benefit for the immediate future. Most rich people buy social responsibility; they don't feel it.



So there you are. If money won't buy friendship, peace of mind, taste, discernment or wisdom, why are we all killing ourselves (and others) to get it? It makes life more comfortable, but never more meaningful. Those who know this put money in its correct place. They use it without worshipping it. A life of meaning is not a life of personal riches; it is a life of reflection, compassion, and engagement.

ケニアの栄養バランス事情

私たち日本リザルツは、途上国の女の子に栄養教育をするためケニアで食堂をはじめます。そのため、クラウドファンディングサイト Readyfor にて、費用を集めるファンディングを実施している。本日は、ケニアの栄養バランス事情について気づいた点をご紹介します。先日、ナイロビのスラム街の1つカンゲミ地区の方々とお食事をとりました。現地の皆さんのお皿をみると、主菜（肉や魚などのたんぱく質など）や副菜（野菜や豆など）よりも、主食（炭水化物）が山盛りでまた、食後のスナックも大人気だ。定着している食事習慣があるかもしれないが、心身の健康を整えるための一工夫も一緒に考えていきたいと思う。ケニアでは、5歳未満のこどもの4人に1人は、栄養不良により発育に問題を抱えている。毎年7000人の乳幼児が結核に感染し、なかには命を失う子どもたちもいる。結核予防にはワクチンが有効だが、栄養バランスの良い食事が欠けるとワクチンの効果は十分に発揮されない。そこで日本リザルツは、貧困のため進学できず、栄養に関する知識のないスラム街に住む10代の女の子を対象にケニア食堂を開店する。家族の健康を守るために何を食べたらいいのか、一緒に調理をしながら実践的な知識を学習する。そして、出来上がった料理は、ケニアのスラム街に住む子どもたちと一緒に美味しく頂く。



2017年09月22日

釜石生活 97 ～様々な災害～

東北の被災地で活動していると、いえ、おそらく日本中の方々が「災害」というと、大地震を思い起こされることだろう。けれど、最近は「ゲリラ豪雨」という言葉があっさりしますが、気象庁の発表も「経験したことのないような大雨となっている所がある」などの表現を使っている。少し調べてみると、台風や大雨被害で毎年約200名の方が、さらに大雪被害でも毎年約100名の方が国内で亡くなっているそうだ。先日の敬老の日を含む3連休も、台風18号が日本列島を北上して、各地で甚大な被害が出た。釜石でも、青葉ビルのすぐ近くで浸水し、青葉ビルの研修室にも水がきてした。「青葉通り こどもの相談室」のワンブロックのところのメインストリートも、一時はこんなに冠水したようだ。

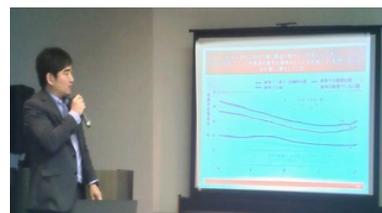


最寄りのコンビニエンスストアはいまだに閉まっている。災害は地震だけではない。私たち現代人は文化的で便利な生活を送っているが、いつ、どのような災害に見舞われるか分からない。自然災害だけでなく、様々な災害に備えながら生きていくことが求められていると言える。

「世界の食料安全保障と栄養の現状 2017」発行記念イベントに参加

もう九月も終盤。時がたつのがあっという間だと実感しているインターンの浅松から。今日は国連食糧農業機関（FAO）主催の「世界の食料安全保障と栄養の現状 2017」発行記念イベントに参加してきた。今回のイベントの登壇者の南口直樹さんだが、本日の午前中に、日本リザルツの事務所にもお越しくださり白須代表と栄養に関するお話などをじっくり聞かせていただいた。今回のイベントでは、発行された「世界の食料安全保障と栄養の現状 2017」に基づいて、世界の子どもたちの栄養不良問題などを南口さんにお話しいただいた。

特に紛争と栄養問題・飢餓問題は密接に関係があり、多くの子どもたちが紛争により栄養不良問題を抱えているようで、心が痛んだ。



写真は、バングラデシュの草の根活動として使用している食育のためのお皿。栄養バランスのいい食事の見本として非常にわかりやすい。(私も一度バングラデシュ料理食べてみたいな～)



今回のイベントは雨だったが、多くの方がご参加していた。

官公庁、企業、NPO、NGO、大学など所属団体の垣根を超えて、皆さんの栄養に関する関心は非常に深いのではないかと思います。

あ、栄養といえば、もうすぐ10月10日はGGG+フォーラムですね!! 栄養に関する国内外のプロフェッショナルの方々がたくさん、ご参加するらしい。

第72回国連総会サイドイベント「UHC:万人の健康を通じたSDGsの達成」

9月18日に安倍首相が国連総会サイドイベントで行ったスピーチをご紹介します。「誰一人取り残さない」社会の実現をするためには、保健、とりわけユニバーサル・ヘルス・カレッジ（UHC）の推進が重要な一部で、日本政府は昨年のG7伊勢志摩サミットやTICAD VIでも国際保健を大きな柱と位置づけ、UHCを推進してきた。今後も国連やTICAD 7等の場で国際保健に関する議論を一層深めたい。持続的かつ包摂的なUHCのためには多くのリソースも必要で、途上国の国内資金、国際機関やドナー国の支援に加え、民間ビジネスや市民社会のリソースを動員し、UHC達成に活用するための枠組みが重要である。

10月10日のGGG+フォーラムは12月に開催されるUHC会議のキックオフミーティングで、1人でも多くの方のご参加をお待ちしている。

安倍首相 国連演説

9月20日の国連総会における一般討論演説において、安倍首相は冒頭でユニバーサル・ヘルス・カレッジの件について触れていた。これは10月10日に開催されるGGG+フォーラムに携わる私達の活動に大いに励みになる言葉であった。私自身は日本リザルツで最近働き始め、新しい領域についてこれから勉強しなければならない事ばかりである。これから貧困問題と共に栄養改善、健康改善、女性のエンパワーメント等について理解を深めていこうと思う。

【相談は場所づくりから】

相談室のレイアウトを変更致した。相談に来られる方々が相談し易く、声のかけ易い【場所】にしていきたいと思っている。



釜石生活 96 ～朗読～

9月20日、釜石市立図書館に出かけた。

小学校、公民館、老人福祉施設、保育園、児童館など、各所で読み聞かせ(絵本・紙芝居)の活動をされている「颯・2000の会」の定例会に参加させていただくため。先日、「子どもの気持ちの学習会」(後半)の中で、絵本を朗読する時間があり、講師の佐々木誠先生から依頼され、朗読や読み聞かせに関する知識も技量も美声もない私がつたない朗読をさせていただいた、ということがあった。絵本なので難しい漢字はなかったが、15分ほどのストーリーが30分にも1時間にも感じられるくらい、ずっと緊張していた。読み終わったときに思ったのは、「もっと上手に読めればよかった」ということだった。「子どもの気持ちの学習会」は、2017年12月と2018年2月に前半、後半をもう一度開催する予定なので、次回はもっと気持ちを込めて強弱をつけながら、“聴かせる朗読”の時間にしたいと思った。そうして、釜石市内で朗読ボランティア、読み聞かせ活動を長年にわたってされておられる「颯・2000の会」の皆さんの定例会にまずは参加させていただき、協力を得られるかどうか、聞くための9月20日の行動だったというわけだ。「颯・2000の会」のメンバーは11名、活動歴はなんと17年だそうで、今回のオファーに関しては、会として話し合っ



【復興の現在】

『知らなかった。』『復興はまだまだ続いているんですね。』
来釜してくれた友人が、私の住む仮設団地を見ての第一声。
その言葉がズシンッと心に響いた。私自身、恥ずかしながら
移住するまで『復興の現在』を知らなかった一人。釜石市は
もちろんのこと東北の復興は、まだまだ道半ば。一見には仮
設住宅も減少しつつあり、復興団地や新築の家が建ち始め、
安定へ向かっていることは事実だが、反面、経済面や生活環
境等の問題が山積しているため、心に悩みや不安を抱えてい
る方がいらっしゃるのも現実だ。『百聞は一見に如かず』そ
の言葉を想わずにはいられない。国内外の方に『復興の現在』を見にいらしていただきたいし、
同時に、お伝えしていきたい。



この写真は友人が撮ってくれたもので、灯りに向かって歩み続ける今の釜石市と重なる一枚。
『未来は明るい』⇒『未来は必ず明るくする!』という心意気で【青葉通りこどもの相談室】は
精進
して行く。

ケニア食堂はじめます

私たち日本リザルツは、途上国の女の子に栄養教育をするためケニアで食堂をはじめます。そのため、クラウドファンディングサイト Readyfor にて、費用を集めるファンディングを実施している。



ケニアの路上には、いろいろな露店があり、生活雑貨から野菜やフルーツ、焼きトウモロコシ、サトウキビ、何やら鍋で煮込んだものなど、様々なものが売られている。また、テントが集まった場所では、日本円にすると 150 円程で昼食が食べられる。こういった青空市場、途上国で税収が伸びない要因にもなっているようだが……。ただ、こういった文化を大事にしながらも、疾病予防、健康増進の方法を栄養面から考えていきたいものだ。

ケニアでは、5 歳未満のこどもの 4 人に 1 人は、栄養不良により発育に問題を抱えている。毎年 7000 人の乳幼児が結核に感染し、なかには命を失う子どもたちもいる。結核予防にはワクチンが有効だが、栄養バランスの良い食事が欠けるとワクチンの効果は十分に発揮されない。そこで日本リザルツは、貧困のため進学できず、栄養に関する知識のないスラム街に住む 10 代の女の

子を対象にケニア食堂を開店する。家族の健康を守るために何を食べてらいいのか、一緒に調理をしながら実践的な知識を学習する。そして、出来上がった料理は、ケニアのスラム街に住む子どもたちと一緒に美味しく頂く。



イベントで伝えたいこと

先日カンゲミのスラム居住区にある教会施設のホール(これまでCHVの研修やフォローアップ会合で利用していた集会所)でイベントがあり、4月以来久し振りに多くのCHVの人たちと会った。ホール入り口辺りで参加者を出迎えるため待機していたが、開始予定時間になっても少数しか集まらず、集いが低調に終わってしまうのではないかと心配した。しかし徐々に参加者が増え、あちこちで賑やかな雑談が聞こえてくると、これから始まるイベントが80%は楽しい集いで終わるだろうとの感触を得た。参加者全ての人顔を覚えていないが、大方の顔は直ぐに思い出した。そんな中で、年配の女性からハグ(外国では一般的挨拶の一種ではあるが)されたときは、一瞬



このイベントは月例報告会に代わって開催したもので、前期事業終了から次年度の開始までの間、支援活動が出来ないため、少しでもCHVの人たちと顔を会わす機会を設け、われわれの支援はまだ続いていること、次期プロジェクトも間もなく始める予定等を伝え、彼らに安心感を持ってもらいたいと思い、イベントの開催を計画した。実際には新規に着任した日本からの女性スタッフの紹介を兼ね、彼女が一人で作り上げた和風カレーを味わってもらう意味も有った。最初は自己紹介で始まり、やや静かな雰囲気だったが、料理が提供された時には楽しみを満喫しているのが、表情ではっきり分かった。料理よりも活動が楽しみだと言う稀有な人のためにも、次年度の開始を早く始めさせてあげたいと思う。

2017年09月23日

多剤耐性菌への警鐘

ケニア大手新聞 Daily Nation 電子版から、多剤耐性結核等を警鐘する WHO の発表記事を紹介する。

WHO が今週木曜日に発表した“Antibacterial Agents in Clinical Development” では、増大する抗生物質耐性菌の脅威とそれらに対抗する新たな薬剤開発の欠如は、今後より多くの犠牲者をもたらすだろうと述べている。過去 70 年間、多剤耐性結核菌の増大する脅威に対し、抗生物質の開発がなされてこなかったことで、毎年 25 万人の命が奪われて来た。多剤耐性菌の治療法が極限られていることは、人間にとって大きな影響を与えることを示している。結核治療の新薬開発では現在わずか 7 種類が臨床段階にあるだけ。“これは極めて大きな問題で、結核治療には少なくとも三種類の抗生剤の組み合わせが要件とされている。そのためにも、多剤耐性菌への研究と開発により多くの投資を”と WHO 事務局長の Tedros Ghebreyesus は語っている。更に“何も手を付けなければ(対処しなければ)、普通の感染症に怯え、簡単な手術でもリスクに晒されてしまう”とも述べている。

2017年09月24日

【メディア掲載】読売新聞 日曜便 靴送ってケニア救おう

本日付(9月24日)の読売新聞(関西版)で日本リザルツの活動が紹介された。

【読売新聞】

[日曜便] 靴送ってケニア救おう

履かなくなった靴は家にありますか？ その靴がアフリカで人の命を救うのに役立つと聞いたら、驚きかないだろうか？ 実にキャッチーだ。

靴をお送りいただく際に何点か注意点がある。

【注意点】

- きれいに洗った運動靴であること
- 上履きやバレエシューズは不可です
- サイズに制限はありません
- 送料はご自身で負担となります

【発送先住所】

〒100-0013 東京都千代田区霞が関 3-6-14 三久ビル 503
日本リザルツ長坂宛

今月頭に東京オフィスを覗いてみたら、ダンボールの山、山、山！

皆さまの「思い」が届き、責任を持って届けなくては、と改めて思う。感謝の気持ちでいっぱい、言葉で表せないほど。その「思い」を届ける先であるケニアの最貧困地域に住み、実際に靴を住民に届けてくれているエドワードが来日、GGG+フォーラムに出席する。



帰国報告② “ケニア生活 ナイロビ編”

前回の記事を書いてから、時間が空いてしまった。先週頭からは大学2年生へ、1年ぶりにキャンパスライフを送っている。週5で授業があり、そこでの時間はやはり刺激的だ。その傍らで日本リザルツ主催の「GGG+フォーラム 2017: UHC と SDGs の実現に向けて」のお手伝いをさせていただいている。

前回のブログにも書いたが、私がケニアの最貧困地域（エスンバ村）で滞在していたエドワード氏が来日、第3部の「水と公衆衛生、トイレ、子ども・女性」では彼のスピーチが予定されている。これってものすごいこと。「アドボカシーって、現地を実際に見て、声を聞かないと意味ありません。彼のように現地で生活して、活動する方の声を聞いて欲しい。切に思います。」前回のブログ、確か移動中の電車で書いたセンテンスですが、我ながら的を得たものだと思う。ブログを読んでくださり、さらに感想や意見をいただくことがある。（ご意見お待ちしております。shiraishi.results@gmail.com）その中でも最も多かったのは、このセンテンスに関することだ。これまで会合など何度か出席する機会をいただいておりますが、そこで話される内容は「思い」が濾過されて、クリーンで、勢いのなく、冷め切ったものになっていると感ずることが多々あります。大学1年生だった私は「議論なんて意味がない」と馬鹿げたことを言っていました。が、1年間の経験を得て、ひとつの注釈を加えて再認識しています。「”思い”のない議論なんて意味がない」と。GGG+は「思い」が「熱意」がある。エドワードには「強い思い」があり出席者の皆様にはそれを聞きたいという「思い」があるはずであると確信している。さらに即実行できる方々が集まっている。まさに「一人ひとりが世界を変える力がある」これはリザルツの理念、アドボカシーの真だ。

前置きが長くなってしまったが、前回のブログでは「エスンバ編」として1年間の前半について振り返りながら書いてみた。今回は「ナイロビ編」として私が従事していた「スラム居住区における住民主導の結核予防・啓蒙活動の拡大支援」について書いてみようと思う。20歳で国際NGOの現地事務所の所長になった。このような機会をくださり感謝すると共に良い経験を得た。この事業は、対象地域（カンゲミ）の結核クリニックを改修して、地域保健ボランティア（CHV）を育成して、彼らの活動を支援する、というもの。つまり対象者は育成した80名のCHVと彼らが抱える結核患者たち。仲間はカンゲミ保健センター、ケニア保健省（準郡）などになる。当たり

前だが、仲間と対象者を完璧に区別することは重要で、ごちゃごちゃになっていると、ダメだ。事業内容については難しくなってしまうので、省略して感じた1点を書いてみる。

それは「ひとを理解することの難しさ」人間は神秘的な生き物だ。それぞれ考えがあって、思いがあって、計画がある。それが良い部分だが、理解するのは難しい。私が見ていたのは80名のCHVと関係者を合わせて100名以上いた。カンゲミにいる結核患者さんを合わせれば、倍々に増えていく。その中で、一つの目標に向かってチームとして活動するわけだから、バランスが必要だ。押し進める部分と妥協する部分。議論でどこを着地点に持っていくか。どのように持っていくか。彼らのモチベーションを向上させて、事業として、彼らの活動として、結核患者さんを救うことができるのか。それが持続可能なものなのか。問題は山積みでしたし、解決できていない部分もある。

事業のコアな部分は、ひとを理解することだったなと思う。ひとを理解しないと、巻き込めない、動かない、何もできない。よく理解できて、戦略的に巻き込めて、動かすことができた1例を挙げる。

年度末になり、対象地域における事業の認知度・満足度を図る調査を実施した。そのサンプル数10,000。80名のCHVがいるから、ひとり当たり125名。それをボランティアでやらせようと考えた。ケニア人、タダでは動かない。どうしようかと考えた。「調査の重要性をしっかりと伝えよう」「事業継続・拡大に直結すると伝えよう」簡単なことだが、しっかりと伝えた。それでも巻き込めない。そう分かっていた。誰もイエスと首を縦に振らない。最初にイエスというのは勇気が要るから、伝える会合前に、その

地域のリーダーのような存在の方を連れ出し、伝えた。彼らは日本人と2人きりで喋るのが嬉しくてたまらない。「いつもありがとう。君はリーダーのような活躍をしている。素晴らしい。君だけに前もって伝えておきたいことがあって、この会合でアンケート調査のお願いをしたいんだ。その時にもあなたにこのグループでの取りまとめをお願いしたい。頼まれてくれるか！」とポンッと肩を叩く。人間って神秘的な生き物で、4つのグループで同様のことをしたが成功率は100%だった。彼らが「そうだ、やろう」というと皆やってくれる。さらにリーダーたちは「リーダーとして」取りまとめをしてくれ、彼らのモチベーション向上を図っていた。報酬を求められなかった。それはこれまで「お金ではなく機会を得ているだろ」と何度も伝えてきていたからだと信じている。

ナイロビ編と言いながら事業に関してではない内容になってしまった。ブログは誰にでも読んで意味があるように心掛けていく。以上の点は、ナイロビだけではなくエスンバでも共通しており、世界どこでも共有する事柄だと思う。相手の身になって考えてみる。口にするのは簡単なことだが、実際に行動に移すのは難しい。

帰国報告はまだまだ続く。次回はエスンバとナイロビの比較をしようと思う。授業の合間合間にちょこちょこっと書いていく。

集客戦隊リザルツレンジャー活躍中

「GGG+フォーラム2017：UHCとSDGsの実現に向けて」を10月10日（火）11:00～15:30にルポール麹町にて開催する運びとなった。9月23日（土）は、レッド池田を筆頭に、白石ブルー、ピーチ姫、イエローカラマツ、そして、ぴんくここのりのレンジャーが集客活動に励んだ。



総計なんと、542人！すごすぎる。らぼーるからは、パープル嶋貴氏が頑張ってくださいている。引き続き、ご参加をお待ちしている。以下ご案内文。

GGG+フォーラム2017では、UHCとSDGsの実現に向けて、感染症対策、貧困問題、人間の安全保障、子どもの健康改善、女性のエンパワーメントなどより様々なアクターを巻き込んで包括的に議論を行うことで、オールジャパンでグローバルヘルスの改善に取り組むことを目的としている。政府、国会議員、国際機関、企業、NGO、学界など、多様なステークホルダーの皆様の情報共有、連携の場となることを期待している。



河野大臣イエメンの人道支援に拠出！

日本リザルツは国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）のキャンペーン事務局をしている。中東情勢に関して、こんなニュースが入ってきた。

河野外務大臣がイエメンのコレラ流行に対し、1100万ドルの支援を表明した。詳細がNHKニュースに載っていた。河野外務大臣は、ニューヨークの国連本部で開かれた、内戦が続く中東・イエメンの人道状況に関する会合に出席し、飢きん対策として1100万ドルの支援を表明するとともに、日本の国益に直結する中東を重視する立場から、和平交渉の再開を後押ししていく考えを示した。中東・イエメンでは、政府と反政府勢力の間で2年以上にわたり激しい内戦が続いていて、衛生状況の悪化から、コレラの感染が拡大し、多くの死者が出ている。ニューヨークで開催されている国連総会に合わせて、22日、イエメンの人道状況に関する会合が開かれ、河野外務大臣は、イエメンの現状に深い懸念を示したうえで、飢きん対策として、イエメンや、その



周辺の合わせて4か国に対し、1100万ドルの支援を新たに実施すると表明した。そのうえで河野大臣は、「すべての関係国は、イエメン国内の各勢力が対話に向かうよう促すため、行動すべきだ。日本の国益に直結する中東を重視しており、息の長い関与を続けていく」と述べ、日本として支援を継続し、和平交渉の再開を後押ししていく考えを示した。(NHK ニュースより) 中東の感染症抑止と、みなさんの健康改善が進むきっかけになるといい。

2017年09月25日

ケニア食堂はじめます

皆様からご支援いただき、ケニア食堂の目標額を達成することができた。ケニアの大統領選挙が再選挙となり治安が不安定な面もあるが、安全に気をつけながら、皆様によりご報告をしたいと思っている。ケニアでは、5歳未満のこどもの4人に1人は、栄養不良により発育に問題を抱えている。毎年7000人の乳幼児が結核に感染し、なかには命を失う子どもたちもいる。結核予防にはワクチンが有効だが、栄養バランスの良い食事が欠けるとワクチンの効果は十分に発揮されない。そこで日本リザルツは、貧困のため進学できず、栄養に関する知識のないスラム街に住む10代の女の子を対象にケニア食堂を開店する。家族の健康を守るために何を食べたらいいいのか、一緒に調理をしながら実践的な知識を学習する。そして、出来上がった料理は、ケニアのスラム街に住む子どもたちと一緒に美味しく頂く。



THE TELLING SIGNS THAT YOU LOVE YOUR JOB

So all of the following may not be the case all of the time... but when you love your job, many of the following should be the case much of the time:

1. You don't talk about other people; you talk about the cool things other people are doing.

"I hear Kuramoto is heading up a new project. What are they working on?" "I'd love to know how Kiuchi managed to rescue that customer relationship." "Ryota developed a new sales channel; is there some way we can leverage that?" When you love your job you don't gossip about the personal failings of others. You talk about their successes, because you're happy for them - and because you're happy with yourself.

2. You think, "I hope I get to..." instead of, "I hope I don't have to..."

When you love your job it's like peeling an onion. There are always more layers to discover and

explore. When you hate your job it's also like peeling an onion - but all you discover are more tears.

3. You see your internal and external customers not as people to satisfy but simply as people.

They aren't numbers. You think of them as real people who have real needs.

And you gain a real sense of fulfillment and purpose from taking care of those needs.

4. You enjoy your time at work.

You don't have to put in time at work and then escape to life to be happy. You believe in enjoying life and enjoying work. When you love your job, it's a part of your life. You feel alive and joyful not just at home - but also at work.

5. You would recommend working at your company to your best friend...

In fact, you can't stop talking about how cool your company is and the awesome work you're doing even when you're away from work.

6. You enjoy attending meetings.

No, seriously, you enjoy meetings. Why? Because it's fun to be at the center of thoughtful, challenging discussions that lead to decisions, initiatives, and changes - changes you get to be a part of.

7. You don't think about surviving. You think about winning.

You don't worry much about losing your job. You're more worried about not achieving your potential.

Not being as impactful as you can.

8. You see your manager as a person you work with, not for.

You feel valued. You feel respected. You feel trusted.

9. You don't want to let your coworkers down.

Not because you'll get in trouble or get a bad performance review, but because you admire them - and you want them to admire you.

10. You hardly ever look at the clock.

You're too busy making things happen. When you do look at the clock, you often find that the time has flown.

11. You view success in terms of fulfillment and gratification - not just promotions and money.

Everyone wants to be promoted. Everyone wants to earn more.

You definitely feel that way too... but somewhere along the way your job has come to mean a lot more to you than just a paycheck. And if you left this job, even if for a lot higher salary... you would still miss it. A lot.

12. You leave work with items on your to-do list you're excited about tackling tomorrow.

Many people cross the "fun" tasks off their to-do lists within the first hour or two.

You often have cool stuff - new initiatives, side projects, hunches you want to confirm with data, people you want to talk to - left over when it's time to go home.

13. You help without thinking.

You like seeing your colleagues succeed, so it's second nature to help them out. You pitch in automatically. And they do the same for you.

**14. You don't think about retirement... because retirement sounds boring...
...and a lot less fulfilling.**

How many of the above statements apply to you and your job? If you said:

0-3: You may want to find a new job. Life is too short.

4-6: You don't hate your job... but you don't love it either. What can you do differently?

7-10: You really enjoy your job and the people you work with

11-14: You are deeply, madly in love with your job! (and your friends are jealous!)

2017年09月26日

ケニア食堂はじめます

ケニアの公立学校では、無償で教育が提供される。しかし、教科書代、給食代などは、やはり各家庭が学校に支払わなくてはならず、そのため、スラムの貧困家庭では、継続的に学校に通学する、または、高等教育に進学することが難しいそうだ。貧困、教育の改善には時間も資金も必要で、まずは、心身の健康を維持するための栄養教室から始めたいと思う。



2017年09月27日

「複十字」No.376 に島尾前理事長の受賞の記事が掲載されました

結核予防会が発行している機関誌「複十字」No.376 に、日本リザルツの前理事長の島尾忠男先生の「世界禁煙デー2017 アワード受賞コメント」と題した記事が掲載されたので紹介する。



CHANGING KENYAN MINDSETS THROUGH COMMUNITY HEALTH VOLUNTEERING

For the longest time, the narrative has been that donors come with lots of money to give to the local residents when they are doing their projects. The same mentality has been in existence with the RESULTS Japan. However, as from the next project, we are pushing an agenda that the people of Kangemi must be self-sufficient and do their activities by their own.

In that light, it has become necessary to inform the community health volunteers that the work they do is for the benefit of their people. We may not encourage a lot of payments to them.

In Japan, the volunteer system is such that no payment is expected. However, some expenses may be catered for. In the long run, as is the case with Kangemi, It is important for them to know how to support their activities, and be self-reliant. Most developed health systems are founded on a self-reliant framework. Therefore, even if donors quit, fundamental work can continue without much problem.

In the future, the Kenyan government should also be informed that its reliance on foreign donors can be its greatest undoing in making significant progress.

Thus, we shall be informing the CHVs to have such in mind from now on.



ケニア食堂はじめます

ケニアの小学校では、11 時頃に休憩時間があり、その際に配られるのが、ケニアンティー。ケニアは紅茶の名産地でもあり、ケニアの方々の生活には、たっぷりとミルクの入ったケニアンティーはかせない存在だそうで、教育の場でも、ケニアの食文化が反映されているようだ。

2017年09月28日

残り1日となりました

先日、ケニアのローカルな食堂に行きました。庭には、日本より少し大きめのサイズの鶏が歩いていた。眺めていると、「夕方に使うチキンよ」とお店の方からご説明が。農場から生きた鶏を仕入れているようで、現地スタッフに聞くと、牛や鶏のさばき方を小さい頃に父親から教わったとのこと。食生活は文化に根差していることを実感した。

ケニアでは、5歳未満のこどもの4人に1人は、栄養不良により発育に問題を抱えている。毎年7000人の乳幼児が結核に感染し、なかには命を失う子どもたちもいる。結核予防にはワクチンが有効ですが、栄養バランスの良い食事が欠けるとワクチンの効果は十分に発揮されない。そこで



日本リザルツは、貧困のため進学できず、栄養に関する知識のないスラム街に住む10代の女の子を対象にケニア食堂を開店する。家族の健康を守るために何を食べたらいいのか、一緒に調理をしながら実践的な知識を学習する。そして、出来上がった料理は、ケニアのスラム街に住む子どもたちと一緒に美味しく頂く。



グローバルフェスタ 2017 に参加

今週末は、お台場にて日本最大級の国際協カイベントの、グローバルフェスタ 2017 が開催される。それに向けて、らぽーる事業でもチラシの配布を計画している。昨年は、2日合わせて10万人の来場者が見られたそうだ。当日のチラシ配布のため、ボランティアさんの力も借りて、2000枚ほどのチラシを準備している！親子ネットさんも一緒にブースを出すので、もしお時間ある方は、ぜひ遊びに来ていただきたい。

ケニア保健省関係の会合

先日ケニア保健省の諮問機関的な会合に、初めて出席した。名称は「Technical Working Group」、また各分野から参加しているため、別名 Multi-sector Meeting とも言われ、3 毎月毎に開催されている。この会合の目的、機能は、感染症などの治療・検査に関わる機器、検査法等を、新たに導入される時や、試験的な期間を経た後に、それらが有効な物か、コストに見合うか、普及させるに値するかを協議、評価する場でもあるとのこと。参加者の所属を見ると保健省下の感染症対策関係機関、外国政府の支援を受けている NGO 団体等で、この日は 5 人ほどから感染症検査機器、方法等の説明があった。発表者にはドクターの称号を持つ方も多く、専門的な内容に話が及んでいた。ここである程度評価された案件は、さらに参加メンバーで構成される小委員会(グループ会議)で検討されるそうだ。今回出席した理由には、次年度で予定している Lamp 法機器類の説明をすることもあった。その前に別の説明者から、名前が似ている LAM 法の話が出た時は、一瞬混乱したが、用途、目的が異なることが後で分かり、感染症に向けた取り組みは、他のところでも進んでいることが実感された会合だった。

「NPO と持続可能な開発目標 (SDGs) についての学習会」開催

9 月 27 日 (水)、NPO と持続可能な開発目標 (SDGs) についての学習会として、「地域の持続可能性をパートナーシップで考える」が開催された。全国各地の NPO を始めとする、様々なアクターが一同に会した。SDGs とは、2030 年までの達成目標として、国際的に定められた 17 の目標で、「誰一人取り残さない」ことを目指している。NPO の活動と SDGs のかわかりが事例として紹介され、SDGs と日本での日頃の活動が密接に関係していることが示された。NPO と企業や政府との連携など、立場の違いを超えて目標を達成するための取り組みも紹介され、今後の SDGs 達成に向けた意見交換が活発になされた。



第1部 14:00-15:45

SDGsが、地域の課題とどう結びつくのか、NPO活動にとって必要なのか、そしてどのようなパートナーシップの可能性があるのか、すでにSDGsを活用している方たちの事例を聞いてみませんか？

講師：SDGsの真髓とは？自分たちの地元から「変革していくために」大森 隆雄 (国政NPO法人自立生活サポートセンターもやい 理事長)

参加者からの報告：伊豆からの報告 石原 康也 (公益NPO法人なでやつくの財団おかなま /NPO法人地産NPOセンター 代表理事)

産水産物NPO法人サロシんせい 事務局長 関谷のまよ子 理事長 (国産広報センター 所長)

第2部 16:00-17:45 (終了後交流会)

地域とSDGsをテーマに、「3R」ディスカッション形式で、様々な主体から問題意識、活動の内容を伺い、それぞれの価値や活動のヒントとします。

司会：リスト(予定) 石原康也 (公益NPO法人なでやつくの財団おかなま /NPO法人地産NPOセンター 代表理事)

賛助委員 (NPO法人サロシんせい 事務局長) 黒田かほり (一社)SDGs市民社会ネットワーク 代表理事) 内閣府地方創生推進事務局 (依頼中) 厚生労働省 (一社)「イニシアチブ」大森 隆雄 (国政NPO法人自立生活サポートセンターもやい 理事長) おべ金子 幸徳 (国政NPO職員連帯推進委員) 津本 貴子 (国政NPO職員連帯推進委員) その他多数

主催：(一社)SDGs市民社会ネットワーク / 国産NPO職員連帯推進委員 / NPO法人シーズ・市民活動を支える制度をつくる会 / 国産NPO法人日本NPOセンター

後援：国産広報センター

※秋の埼玉・北海道及び岡山でもイベントを開催予定です。SDGsイベントに関する詳細は www.sdgs-japan.net まで

2017年09月29日

釜石生活 99 ～くまモン・かまりん塗り絵展覧会 だもん～

釜石からのイベント告知。

「青葉通り こどもの相談室」は釜石市子ども課の委託事業として平成28年11月1日に開設され、相談業務と同時に様々な研修会、相談会、学習会等を開催し、子どもを育む人（親、家族、支援者等）を支え育む取り組みを進めている。日本リザルツは、釜石市と同じく復興と更なる発展を目指



して歩む熊本市でも、「被さいした母子のメンタルサポート事業」を実施した。その一環で世界中の子どもたちが描いたくまモン塗り絵を1,000枚以上集めた。そして、くまモン塗り絵展覧会を開催した。塗り絵は描いているときも脳を活性化させるそうだが、世界中の子どもたちが描いたたくさんの塗り絵に、見る人皆が励まされた。

そこで、このたび、「くまモン・カマリん塗り絵展覧会」を釜石で下記の要領で開催することとなった。

日時	平成29年10月5日～10月10日（10月8日を除く）
場所	イオンタウン釜石 イベントスペース
セレモニー	平成29年10月9日10時「釜石応援ふるさと大使」イボンヌ・チャカチャカ来場
展示枚数	くまモン1,000枚、カマリん500枚
塗り絵参加都市	熊本、釜石、愛知、東京、パレスチナ自治区ガザ地区や難民キャンプの子どもたち、ケニア、ネパール、タイ、ラオス、フィリピン
塗り絵コーナー	その場でも楽しんでいただけるよう「塗り絵コーナー」を設置

釜石生活 98 ～後進に道を譲る～

朝晩の冷え込みが強くなってきました。これから東北の山々は鮮やかに色づき、息をのむほど美しい紅葉の季節を迎えるが、その頃には私は釜石を離れることになる。釜石に赴任してちょうど1年、季節は一回りして2回目の秋が深まるにつれ、去年の秋と比べてモノを言う自分の地元民のような態度に、驚いたり笑ったりするこの頃だ。「青葉通りこどもの相談室」も1年目の基礎固めは自分なりに頑張ってきたつもりだ。もう少し、大きくしっかりした基礎を築ければよかつ

たかもしれないが、2年目の相談室に大いに期待できそうで安心している。9月から、業務を共にしながら後任への引継ぎをしていく。「青葉通り こどもの相談室」相談員の後任は精神保健福祉士資格を持つ男性。はじめは女性の方が柔らかい印象でよいのではないかと考えたが、後任は、型通りではない独自のスタイルでお話を聴く人で、何でも話したくなる不思議な力を持った相談員だ。精神保健福祉士という国家資格を持っており、経験値も高く、相談室としてできることの範囲を格段に広げていけそうだ。私が作ってきた基礎の上にどんどん素敵な家ができていくことや、公園になって人が集まる場所になっていくことを、楽しい思いで眺めている。

歩いてきた道を振り返り、少しだけ誇りに思い、至らない自分を反省もし、感謝の気持ちでいっぱいになりながら、間もなく開催される塗り絵展覧会の準備に奔走している。落ち着いたら、

歩いてきた道を見るばかりでなく、歩いていく道を見なければ…と思う。



残り8時間となりました

皆さんからご支援を頂き、目標金額を達成することができた。しかし、定期的にケニア食堂を開催するには、もう少しの資金が必要だ。残り8時間となったが、ぜひご支援のほどよろしく願いしたい。カンゲミの子どもたちとともに進めていく。



【アンガーマネジメントキッズインストラクター養成講座参加】

アンガーマネジメントは色々な書籍もあり、拝見したことはあるものの、キッズ向けは初体験。「怒りの感情」、「怒りのボキャブラリー」、「怒る理由」など怒ることについて学習しながら、幼児期～小学生の児童に対するアンガーマネジメント技法について習得してきた。怒りは二次

感情であり、一次感情である不安、嫌だ、痛い、つらい、苦しい、寂しい、虚しい、悲しい等から派生したものであり、自身の怒りの感情を紐解くと一次感情に繋がることが講座を通じて発見することができた。怒るのを止めるではなく『怒る気持ちとうまく寄り添っていく』、優しいコミュニケーション技法であった。同時に、子どもへ伝えるボキャブラリーも

必須であり、如何に怒る気持ちを子どものニュアンスにマッチングさせながら、伝えることができるのが重要となる。心の専門家として、非常に遣り甲斐のある部分だ。今後、アンガーマネジメントキッズ講座を開催するにあたり、今研修で得た知識や技法を活かし、釜石市の子ども達へアプローチしながら、自身も成長させていきたいと願っている。

※写真は「青葉通りこどもの相談室」から見える、いつもの眺めを掲載致した。



【支援者研修会のお知らせ】

釜石市保健福祉部子ども課委託事業、『被災した子どもの養育相談支援事業』

支援者研修会の開催のお知らせ。

《講師》

国立大学法人 岩手大学 三陸復興・地域創生推進機構
特任准教授 佐々木 誠 氏

《テーマ》 『傾聴』

『傾聴』は、カウンセリング等のコミュニケーションにおける技能の一つであり、「聞く」ではなく、「聴く」ことに特化させたものとなる。それにより、クライアントが自身の言葉を通して、クライアント自身の力になるようアプローチするものであり、支援の土台になるものだ。誰もが持ちうる技能ではある反面、見直す機会の少ないものとも言える。私自身、今研修会において実施者側ではあるが、傾聴技能を研鑽する機会に恵まれ、非常に楽しみにしている。多職種の交流も含め、参加される皆様が基本技能である『傾聴』を改めて見つめ直す良い機会になればと願っている。



ケニアの子どもたちの夢と明るい未来の一步へ

先日、スナノミ症の感染予防のため、ケニアの子どもたちに靴を送るという、日本リザルツの活動が毎日新聞、日経新聞、山形新聞、南鹿児島新聞など全国各紙にて紹介された。

新聞をご覧になった皆様から、連日、靴をケニアに届けたいという嬉しい問い合わせが日本リザルツに殺到している。また全国各地の皆様から、靴が日本リザルツにぞくぞく届き、日本リザルツのオフィスは靴が入った箱が山のように積み上がっている。ご協力くださった皆様に、心より感謝申し上げたい。皆様からの靴は、ケニアの子どもたちの夢と明るい未来の一步、そして「世界スナノミデー制定」という大きな一步に繋がっている。家庭でできる国際貢献だ!

2017年09月30日

アフリカの若者たちへの施策

国連が発表した“アフリカの若者への対策”について、ケニアの大手メディアが掲載したコメントに触れてみたいと思う。

「アフリカの若者の人口は急速に増加しており、若い世代の国々が増えている。対策のポイントは、教育と技能、エンパワーメント、雇用と資本の4つの主要分野に、焦点を当てることにある。国連は、社会経済開発を迅速に追跡するために、アフリカの若者にもっと焦点を当てるべきで、教育は良いが失業している若者が増えている現状をもっと認識すべきだ。多くの人には自分自身の生活を維持するための十分な制度、権利が整っていない。国連は、これらの若い国を支援するための戦略を策定すべきだと考えている。ケニアの国連常駐コーディネーターである Siddharth Chatterjee 氏が唱えるように、ジェンダーと若者は開発アジェンダ(目標・課題)の中心になければならない。アフリカで世界的にレベルの高い高等教育機関に入学できたとしても、就職機会はますます見つけ難くなっている。これにより、若者は地球規模の気候変動、人身売買、アルシャバブなどのテロ集団の影響を受けやすくなっている。ケニアでは、若者の失業率はルワンダ、ブルンジ、タンザニア、ウガンダの40%を上回ると推定されている。青少年起業家精神は雇用を創出し、これらの課題のいくつかを解決することができる。アフリカの政府はこれにいくらかの資源を配分しようとしたが、資源は不十分で、これらの現状を踏まえ更に具体的な施策を各国に求めるべきだ。」

若者を単に救済するだけでなく、潜在能力を活用する環境を整えていくのも政府の義務であると思う。一握りの政治家、富裕層が政治・経済を支配する構図は、近い将来において国の衰退をも導きかねないことを、十分認識すべきではないかと思う。